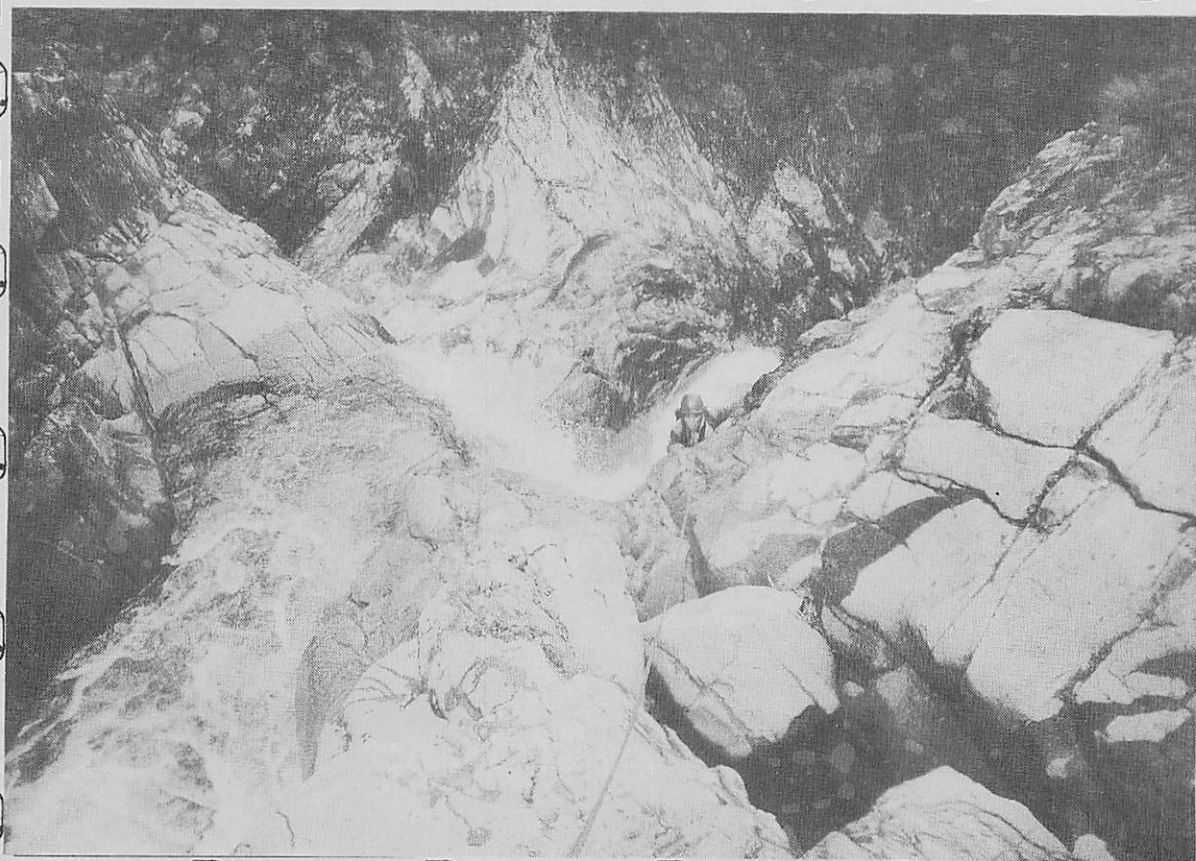


北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 34号

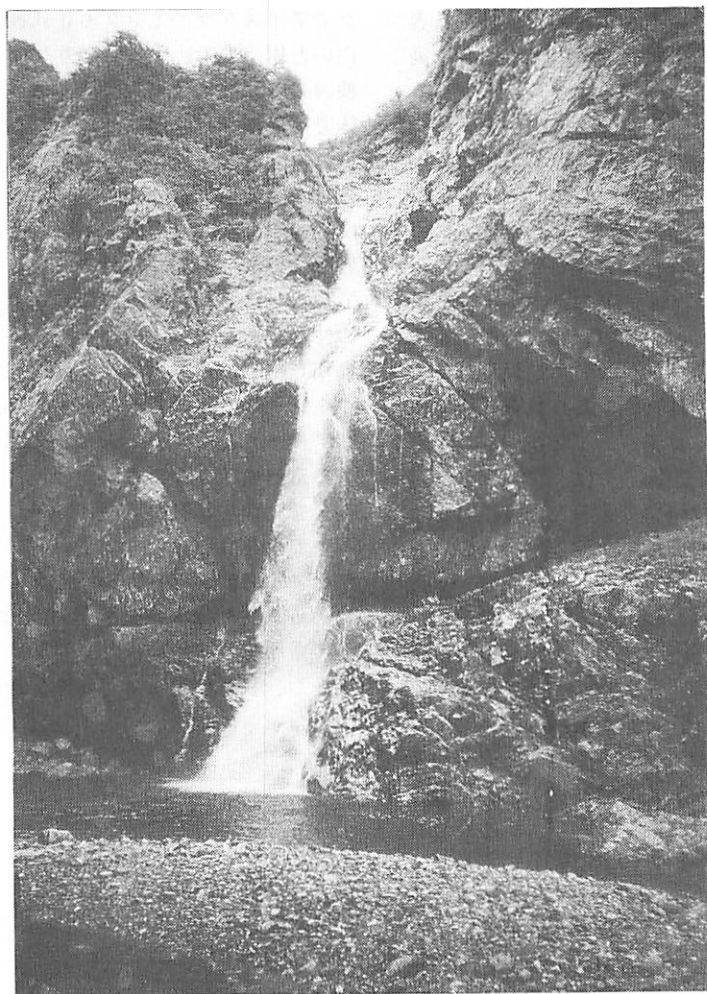
1999年7月~9月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

Rock and valley 99' 夏 No34



裏越のセン下部 《Photo by, MOTOZU》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

岩登りゲレンデで感じた事

20数年前、若かりし頃通った岩登りのゲレンデは今、フリークライミングのフィールドとして花盛りと聞く。確かに近郊のゲレンデに行くと、かつては人工登攀のトレーニングに最適だったルートがフリー化され、沢山のフリークライマーが楽しんでいる姿を目にする事が出来る。しかし、アルパインクライミングを実践している我々にとっては、人工登攀の練習する場所が減少して困る事がある。そこで今回は近郊のゲレンデで感じた事を少し考えてみたいと思う。岩登りを実践する者にとって様々な目標があると思う。ある者は近郊のゲレンデで練習を重ねて谷川岳の岩場、穂高岳、剣岳の岩場を目標とする事でしょう。また、ある者にとっては日本の岩場でトレーニングを積み、ヨーロッパアルプス&ヒマラヤの大岩壁を登る事を目標とする事でしょう。フリークライミング中心に活動するクライマーにとっても、近郊のフリークライミングの練習場でトレーニングを重ねてヨセミテの大岩壁を目標にする事でしょう。またインドアのクライミングボードでトレーニングを重ねて小川山の岩場を目標にする者等、多種多様であると思う。近郊のゲレンデはそこに通うクライマーの共通の練習場であり共有の場であると思う。フリークライミング5、12ルートのすぐ隣に人工登攀の練習ルートがあるのは、フリークライマーにとっては看過出来ない事であると思う。しかしそこを練習の場とするアルパインクライマーの意志も尊重する事が必要ではないかと思う。一流のフリークライマーの努力は厳しいものがあると聞く。食事面、筋力トレーニング、持久力トレーニング等を毎日継続し、更に毎週フリークライミングのルートに登る事でハイレベルのフリークライミングが維持出来ると聞く。そのような努力の積み重ねで、かつては人工登攀のルートをフリー化していくので、安易にハーケン連打等は看過出来ないのは理解が出来る。しかし、誤解を恐れずに言わせて戴くとゲレンデは所詮ゲレンデであり、岩登り技術は山を登る為の一つの技術であると考え。その技術向上の為にはゲレンデでフリークライミング及び、人工登攀のトレーニングを重ねてマルチピッチの岩壁を経験して、アルパインクライミングが実践出来ると考える。一部のフリークライマーの中には、岩は登るが山は登らないクライマーが居ると聞く。

かつてのスキーが雪の山野を駆け回る為の手段であったが、スキー技術のトレーニングの為にゲレンデ(スキー場)が出来ると、そのゲレンデ(スキー場)でのトレーニングが面白く、手軽に出来るのでスキー人口

が急激に増加し現在に至っているが、その反面、スキーで山野を駆け回る人は一部の限られた人間になってしまった。しかし、近年山スキー&テレマークスキーに活気が出てきており、私個人としては嬉しい事である。近郊の岩登りゲレンデにおける状況はかつてのスキーに類似しているような気がする。近い将来フリークライミング競技がオリンピックの正式競技に採用され、お茶の間のテレビで一流のフリークライミングの妙技が見られる日も近いと思う。更に冬季オリンピックでアイスクライミングも正式種目に採用されれば面白いと思うので、IOCのサマランチ会長さん真剣に検討して頂けませんか。でもその前に日本の冬季国体で採用されれば画期的な事と思いますが……。世の中の流れが短小軽薄になり、重厚長大の代表である登山が敬遠されるのはしかたがないと思うが……。反面、中高年の登山ブームはとどまる所を知らない、岩登りのゲレンデにおいてもガイドの講習会に参加しているメンバーの大半は中高年である(我々も中高年の仲間であるが……)。しかし、ここ数年中高年登山者の遭難事故が多発傾向と聞くが、大半はハイキング等での経験不足&装備不足が原因らしい。

アルパインクライミングを実践している中高年登山者の遭難事故はあまり聞かない。アルパインクライミングを実践する為には前述のトレーニングをはじめ、四季の山を登る為の技術やセルフレスキュー技術等を修得する必要がある、一朝一夕では身に付かない技術である。我々はこの技術を会の先輩から教わり、そして後輩へ伝えるためにゲレンデを多いに活用したいと思うし、我々が学んだゲレンデを後世まで残したいと思う。

(木村一 記)

《目次》

1999年 夏号 7～9月 ACC-J 茨城

岩登りゲレンデで感じた事	・・・ 1
集会報告	・・・ 3
山行報告	・・・ 4
大真名子・子真名子ハイキング	・・・ 5
西表島・仲間川遡行～仲良川下降	・・・ 6
南アルプス南部縦走	・・・ 11
丹沢・小川谷廊下	・・・ 14
巳ノ戸谷	・・・ 15
滝沢下部ダイレクトルート～滝沢第3スラブ ～ドーム壁横須賀ルート	・・・ 16
中高年登山教室（八ヶ岳・赤岳）	・・・ 17
魚の沢	・・・ 19
金木戸川・双六谷本谷	・・・ 21
カルフォルニア・クライミングスクール体験記	・・・ 24
ドウドウセン&裏越のセン（その1）	・・・ 27
丹沢・伊勢沢	・・・ 29
谷川岳・幽の沢・V字状岩壁左ルート	・・・ 30
谷川岳・東尾根	・・・ 31
ドウドウセン&裏越のセン（その2）	・・・ 32
*コラム 私の50名山	・・・ 33
阿武隈川・南沢右俣	・・・ 34
ドウドウセン&裏越のセン（その3）	・・・ 35
笛吹川・鶏冠谷・左俣	・・・ 40
谷川岳・幽の沢・V字状岩壁右ルート	・・・ 40
友好山岳団体の月報・会報・その他	・・・ 42
編集後記	・・・ 44

裏越ノセンの登攀

〔Photo by K.Motozu〕

集会報告

(於、スカイラークガーデン)

-----【 7 月 】-----

7 月 7 日

出席者 木村、菊地、古山、吉田、渡辺

7 月 21 日

出席者 本図、菊地、木村、古山、笹平、中島、鯉河、渡辺、吉田

-----【 8 月 】-----

8 月 4 日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、高木、吉田、渡辺

8 月 18 日

出席者 本図、木村、菊地、渡辺、吉田、古山、笹平

-----【 9 月 】-----

9 月 1 日

出席者 本図、菊地、木村、古山、笹平、生井、吉田、渡辺

9 月 16 日

出席者 本図、菊地、木村、古山、笹平、吉田、渡辺

9 月 29 日

出席者 本図、菊地、木村、鯉河、古山、笹平、生井、吉田、渡辺

山行報告

《 1999年 7月～9月 》

---【 7月 】---

7月 3日	日光・大真名子	渡辺、他5名
7月8～12日	西表島	Ⓐ本図、他1名
7月15～18日	南アルプス	渡辺、他2名
7月 25日	丹沢・小川谷	Ⓐ古山、木村、菊地、渡辺、吉田、笹平

---【 8月 】---

8月 1日	日原・巳ノ戸谷	Ⓐ本図、高木、菊地、吉田、渡辺
8月 1日	谷川岳・滝沢第三スラブ	Ⓐ古山、笹平
8月7～8日	ハヶ岳	Ⓐ本図、菊地、その他
8月 8日	魚ノ川	Ⓐ古山、渡辺、吉田
8月13～16日	双六谷	Ⓐ古山、笹平、吉田、渡辺
8月13～15日	赤谷川（ドウドウセン）	Ⓐ本図、他1名
8月22日	丹沢・伊勢沢	Ⓐ本図、古山、吉田
8月29日	谷川岳・幽の沢・V字の左	Ⓐ古山、笹平
8月29日	谷川岳・東尾根	Ⓐ本図、菊地、木村、渡辺、吉田、生井 名雪、松原（ACC-J東京）

---【 9月 】---

9月4～5日	赤谷川（ドウドウセン）	Ⓐ本図、他1名
9月 5日	阿武隈川・南沢	Ⓐ古山、渡辺、吉田
9月11日	赤谷川（ドウドウセン）	Ⓐ本図、他1名
9月12日	鶏冠谷・左俣	Ⓐ古山、渡辺、吉田
9月26日	谷川岳・幽の沢・V字ノ右	Ⓐ古山、渡辺、吉田

大真名子・小真名子ハイキング

1999. 7. 3

パーティ 渡辺聡子 他5名

南ア縦走を2週間後に控え、足慣らしをかねて霧降高原のニッコウキスゲを見に行くことにした。予定では志津峠から入山し女峰山を越えた処で1泊、赤雉山を越えて満開のキスゲの高原に降りるはずだったが、折しも梅雨まっただ中、前線通過という天気予報と朝の小雨に気持ちも萎えて大真名子・小真名子を歩いて温泉直行コースに変更し奥日光へ向けて出発した。途中どしゃぶりの雨にあい、車の中では温泉直行モードに入っていたが、志津峠に到着してみると雨は不思議にやんでいて、先についていた3人は出発の準備をしていた。「え～、いくのー!？」としぶってみたけれど1対5では勝てるはずもなく、雨具を着ての出発となった。出発して20分もたたないうちに一人が体調不良を訴えた。彼女は奥日光が鬼門らしく、いつも途中で気分が悪くなり頂上まで行けたことは一度もない(今回で3回目)のだそう。奥日光以外の山行ではいつも絶好調ということなので、ここにはなにかあるのかもしれない。下りて志津小屋で休んでいるというので、そこで分かれて5人で再び歩き出した。志津峠から大真名子の間には日光三険の一つ「千鳥返し」があって山地図には「急斜面・転落注意」とまで書いてある。どんなところだろうとわくわくしながら

登っていくと「あれっ、ここもしかして頂上じゃない？」という声が聞こえてきた。そんなはずはないでしょうと思いつつ行ってみると、確かに大真名子山頂と書いてある。「千鳥返し」ってどこだったんだろうとちょっと拍子ぬけしながら大真名子を後にして小真名子へと向かった。1時間ほど歩くと小真名子山頂に到着。360度見渡す限りの素晴らしい霧を堪能しつつ休憩をしていると再び雨が降り出してきたため出発し先を急いだ。小真名子山頂からの下りは延々とガレ場が続いていた。ガレを下り切ると富士見峠である。名前からして昔はここから富士山が見えたんだらうねと話しながら林道に入りそのまま志津林道を通って志津峠に戻った。志津小屋で休んでいた一人を迎えに行き車に乗り込んだとたんにそれまで小雨だったのが一転してどしゃぶりに変わった。ラッキーだったねー、さあ温泉。と言って車を走らせ、日光市営やしおの湯に入って帰ってきた。

(渡辺 記)



西表島・仲間川遡行～仲良川下降

1999. 7. 8～12

パーティ L 本図一統、関口幹（笠間おちこち山の会）

西表島は去年の正月にも行ったが、日本離れした風景と大ウナギに魅せられ、又行きたくなった。西表の沢で、沢登りを目的にするとイマイチかも知れない。沢歩き、もしくは沢旅をしようとすれば、遊び方によっては非常に楽しめる。今回の最大の目的は大ウナギ捕獲である。22号のムツ針と14号糸を使って、はえなわ状の仕掛けも3本作った。パートナーは、この山行のために先月まで私と何回かの訓練山行を重ねてきた、笠間おちこち山の会の関口幹氏である。

7月7日の夜は前回と同じように水島さんの家に泊めていただく。水島さんは相変わらず元気なようで安心した。水島さんとは、私が20歳でACC-Jに入会して以来、山を媒体として私の人生の3/5を共に過ごしてきた。私はもとより、現在65歳になられる水島さんも独身の頃からの付き合いである。

7月8日。水島さんに見送りを受けて人形町から1番電車に乗る。去年は無かったのだが、今年は2番電車が羽田空港行きになっていた。時間はそれでも十分に合うし、乗り換えの必要がないのでそれでも良いのだが、駅員に確かめる時間もなかったのて「急がば回れ」の如く大門下車、浜松町からモノレールで羽田という確実なルートをとった。

那覇空港はドシャブリの雨だった。空港内の標示板には石垣島の天気は雨と報じている。飛行機は遅れることなく石垣島に着陸した。雨は降ってないが、時々わか雨が来るといった天気である。離島桟橋までタクシーで行き、荷物を置いて西表までの切符を買ってから町に出た。ウナギ釣りのえさと酒を買うためである。離島桟橋近くの半地下市場で鳥肉を1キロとオリオンビール、泡盛を買った。

高速船で大原港に着くと、間もなく「マリン海遊」の方がやってきた。この人は「トマの風」の手嶋さんから教わった業者で、仲間川を遡上するための船の手配を依頼したのであった。大富に着くと既に船は準備されていてすぐに乗り込む。出発日もこの時間が満潮になる日を選んだ。なぜならば満潮でないと浅くて上流に船が行けないからだ。一般の人達だったら第一日は宿でも取ってゆっくりするであろう。私だって日程に余裕があればそうしたいが、私の旅はいつも忙しく、皆さんには申し訳なく思っている。

40分くらいで入江の奥に着いた。船頭さんは手を振って戻って行く。もう何としても山を越して反対側に下らなければ脱出はできない、と考えると妙な孤立感に襲われたりする。さて船で一気に入ってきてしまっ

たので現在地が分からない。GPSで現在地を確認しようとするも表示しない。何回かやってみたがだめだった。後で分かったことだが、どうやら私の操作方法が間違っていたようだ。今回は夏なのでハブが多いと考え、できるだけ対策をして出発する。対策と言ったってスパッツ履いて手袋しただけだが。まもなく周りの地形から自分達の位置はわかってきた。それと分かり切っていたことだが非常に蒸し暑い。雨が降ったり止んだりの天気なのに暑い。汗は滝のように流れるので、脱水症状を起こさないよう水をガブガブ飲むが、これがまた非常に温くてまずい水なのである。これで日が差したら、とんでもない暑さになるのではないかと心配だ。西表の沢に河原は存在しない。泥と岩と亜熱帯植物で構成されている。その岩も苔が生えているため良く滑るので十分注意が必要だ。同行の関口氏は調子が良くないのかスピードが上がらない。そのうち息づかいも荒くなり、歩くのが困難になってきた。聞くと、暑さで参ってしまったというので、まだ予定の半分も来ていないがビバークすることにした。ヤブを切り払い幕営地を作る。時間的にはウナギ取りを仕掛ける余裕はあったが、いい場所がなかったのでやめた。今回持参したメッシュテントはなかなか良かったが、それでも暑くてシュラフカバーに入ることなんて考えられず、横になっているだけで汗が出てきて困ったほどだ。私はバンソー丁で寝た次第で、女性の同行者がいなくて本当に良かった。私の立派な逸物をもったいなくて見せられないもの。しかし、そんなに暑くても焚火をやることを忘れはしなかった。

9日。本土の沢登りでは、夏でも朝は涼しく気持ち良いものだが、西表は朝から暑い。関口氏の具合が気掛かりだが、今日中に仲良川中流部の、今年の正月に手嶋氏達がビバークした場所まで降りたいので予定の時刻に出発する。詳しく説明すると標高65m地点に左岸から入る枝沢を登り、仲間山の北350mにあるコルを越して、標高130mの仲良川本流合流点までだ。だがこの暑さは如何ともしがたく関口氏はだいぶ苦しそうだ。左岸からの枝沢分岐で彼の荷物を私のザックに移す。いくら西表の沢といっても源流部は滝が出てくる。その殆どは直登できない。高巻くにも関口氏は動けなくなってきた。さらに荷物を私に移す。私は立ち上がる時すぐに立てない程荷物が重くなり、冬山よりも荷物が肩に食い込んで苦しい歩行になった。先程から予定進路よりも約30度北にずれていることは分かっていた。本流を選んで来たのだがそれがルー

トミスだったか？そのうち西に向くだろうと思っていると正面の尾根が低くなり反対側が見えた。地図と磁石で見ると私の予想とは逆で、反対側は仲間川、今私達が登ってきた方向は仲良川ということになってしまう？？それも5m位移動すると磁石の示す方向が変わるので私の頭の中はパニックになってしまった。「どうして？なんで？」を頭の中で繰り返す。ジャングルで視界がきかず木に登ってみると、微かに視界が開け右手にピークが見えた。あれが無名峰で、すると今登っているのは仲間山かな？いやそれにしてもちょっと納得できないな。1時間ほど視界と地図をにらめっこして考えこんでしまった。現在地からだ反対側の景色は、地図上では仲間川側よりも仲良川側の地形に似ている。磁石の示す方向がおかしいんじゃないのかな。

私・『関口さん、回りの地質によって磁石が正しい方向を示さないことがある、ということを知ったことがある。ここも少し場所を変えると方向が変わるんだよ。自分の考えとは逆の方向を示しているんだよ。ここでは結論を出せないから仲間山の頂上まで頑張ってくれる』

関口氏『はい、頑張ってみます』

しかし、歩き始めて100mも進めず動けなくなってしまった。追い打ちをかけるように夕立みたいな大粒の雨も降ってくる。

『俺、もう山から降りられないかも知れない』
なんて弱音を吐き始めた。

『なに関口さん言ってんだよ、こんな山で死ぬわけねえだろ、後は降りるだけだから、日数も余裕あるし頑張っ

て行こう。よし今日はここでビバークしよう』と励まし続けた。ビバークは尾根状の比較的平らな場所が見つかり水も近くで取れた。薪も近くに必要量はあった。今日は私も疲れた。こうなったらせめてイリオモテヤマネコでも姿を見せてくれないかな、などと考えているうち寝てしまった。

10日。関口氏にとってもピークに立つ力は残っていない。かといって私一人でピークに立っても、このジャングルの中をここに帰ってこられる自信はない。ジャングルのなかでバラバラになることは論外である。ここで私は一つの結論をだした。

私……『関口さん、頂上へ行くのは無理だから、磁石の指す方向とは逆だけど、この尾根の反対側に下ってみようと思うんだ。間違いならすぐ分かるから、その時は登り返しになるけどそれでいいかい』

関口氏『はい、わかりました』

ウナギのえさになるはずだった鳥肉が腐って強烈な匂いを発しているが、捨てるわけにもいかずザックにしまい込む。枝沢を下降し始めてすぐ右より沢が合流する。よく見るとなんと足跡があるではないか。関口氏の靴とあわせてみるとピッタリ合った。ザックを置いて空身で下っていくと見覚えのあるゴルジュに出たので間違いが確定した。ここでも磁石の示す方向は逆なので、尾根上での磁石指示は正しかったのだ。しかし、数m移動しただけで方向が変化したのは、今でも何でだかわからない。結局登った沢は180度向きを変えていたわけだ。この辺りは地図では分からない沢が入り混んでおり、やはり



仲間川に行く

自分の勘より磁石の方があてになる（当たり前か）。マメに磁石を確認していたつもりだったが、関口氏を励ましたり、彼をどのように下山させたら良いか考えているうち確認を怠ったのかもしれない。昨日と同じ沢を登る気がしなかったのも、一本北の枝沢を登ってから磁石で進むことにした。そのうち登れない滝が出てきたので、高度もよいし磁石方向に向きを変えた。小さな尾根と沢を何本も横断した。関口氏は登り返しという精神的ショックも加わって疲労は極に達しており、50m歩くと座り込んでしまうほどであった。私も結構疲れており、ハブなどもうどうでもよくなっていた。食いつかれた時はなるようになるさの心境である。水族館で見るような亀や猪と出会った。やっと地図でも磁石でも間違いないと思われる沢に出たので、それを下って行くと滝が連続して懸かり、懸垂下降を繰り返す。私は荷物が重すぎて懸垂下降体勢が保てず、どうしても頭が下になってしまい苦しい下降だった。誰か見ている人がいたら懸垂下降の初心者だと思われたろう。やがて緩やかな流れになり平流を降りて行くと仲良川本流にでた。たしかここが手嶋さん達のビバークした場所のはずと、探してみると左岸に焚火の跡を発見した。時間は早い。本流を少し下った右岸を整地してビバークとする。冷麦を作って食べたが美味しくて疲れた体でもいくらかでも食べられた。関口氏もあと少しで下れる見通しがついたからか元気が出てきたように感じられた。

悪臭を放っていた鳥肉を焚火で焼却する。ウナギのえさに考えていたのは鳥肉のほかカエル、ワーム（ブラックバス釣りに使う疑似餌）などだが、思っていた通り山中にカエルはいなかった。私にワームでウナギ取りをするファイトはもう残っていなかった。夜中、テントの中にムカデが入ってきて驚かされるが刺されはしなかった。私は今日もパンツ一丁で寝たのだが、ダニだと思うが全身数百カ所食われてしまった。

11日。少し下ると溪相ががらりと変わり、ナメの中に滝が連続する奇麗な所に出た。西表にもこんな所があるんだと嬉しくなってくる。1～2回懸垂下降をすると、幻の滝といわれ一部のツアー客も入ってくる大滝に出た。一瞬どうやって降りるのか迷ったが、左岸を巻き降りることができた。ここからは道があり関口氏も元気を取り戻したようだ。3日間人跡のない山中を彷徨い歩いてくると、この人間臭さが懐かしき思うのであるから人間て贅沢なものである。やがて船着場に着いた。我々が予約した2人用カヌーが一隻寂しく準備されていた。マリン海遊さんありがとう。一日遅れたので引き上げられてしまったかと心配していたが大丈夫だった。この日の為に



幻の滝

木村君の世話でカヌーの練習も小貝川でやってきたのだ。だからカヌーを漕ぐことについての不安は全くなかった。

いよいよ白浜に向かって漕ぎ出すと幻想的な風景に出会った。それはサガリバナが川面いっぱい浮かんでいるのだ。

「サガリバナとは沖縄でも知る人ぞ知る花で、6～7月頃の夜に咲き、朝には散ってしまうという。琉球王朝の頃は、王様が各お妾さんの庭に植えさせ、夜の花見と香りを楽しんだそう。またこの花は別名サワフジといって、必ず水の流れる湿地帯にあり、ハブがいる条件とびったりで足元には十分注意が必要だとか。これを見学するカヌーを使った花見ツアーもあるらしい」

それを見たくてか、何艘かのカヌーも上がってきた。一目見てガイドと分かる人に声をかけられた。

ガイド『モトズさんですか？』

私『はい、そうです』

ガイド『マリン海遊の者です』

私『遅れてすみませんでした。今下山してまいります』

ガイド『はい、おつかれさま、お気をつけて』

私 『はい、ありがとうございました』

丁度引き潮の時間らしく、かなりの速さで沖に向かって流れがあり、カヌーを止めて話すことができなかった。あっという間に離れてしまったが、我々にとっては非常に楽だった。また、水深も浅くて深い所を探しながら行くものの、カヌーの底を擦ってしまうほど浅い場所もあった。なるほどこれでは確かに干潮時には船は上がって来られないはずだ。左手の内離島が近くなったころ、サンゴ礁を避けて進路を右にとり白浜に上陸した。マリン海遊のお姉さんはビックリしたような顔をして『どこから来たんですか』と聞くので『仲間川から』と言うと

『すご〜い、ハブいませんでした？ヤマネコと会いましたか？』。
やはり西表の人もハブは怖いしヤマネコには会ってみたいらしい。

予定では浦内川を溯って大富に出るつもりだったが、日数がないので帰るしかない。すぐに出るというバスに乗って大原に向かった。途中今までに経験したことのないような豪雨に会い、美原で降りるバスのお客も降りるに降りられず、バスが横道に入って由布島に行く馬車の乗り場まで乗せていくも、バスを降りたと同時にびしょ濡れになってしまった。でも大原に着くと雨は降ってなくて助かった。マリン海遊のお店に行き下山報告をして荷物をまとめ、宅配便でザックを自宅に送った。また来ることを約束して西表島を後にした。

石垣島では昨年利用したビジネスホテルマリーナに泊まることにした。おやじは相変わらずステテコ一丁で元

気にやっていた。夜、郷土料理を食いに町に繰り出したのは言うまでもない。

12日。一日早く山から下りたため余裕ができたので日本最南端の島である波照間島に行く。波照間島にはタクシーもバスもなく、港でヒッチをやったらトラックが止まってくれて集落まで乗せてくれた。レンタルオートバイで島を一周する。短時間で観光するにはこれに限る。さぞかし島の人達には中年暴走族に見えただろう。

帰りの那覇からのフライトではオーバーブッキングでもあったのだろう、スーパーシートに乗せてくれた。さすがビールは出るし、なかなか快適でありました。

8日。入江(14:36)ービバーク地(17:31)

9日。出発(8:12)ー枝沢出合(9:50~10:34)ービバーク地(14:23)

10日。出発(6:35)ー無名峰頂上直下(11:08)ー仲良川本流出合(14:42~14:56)ービバーク地(15:41)

11日。出発(7:16)ー船着場(9:30)ー白浜(11:57)

(本図 記)

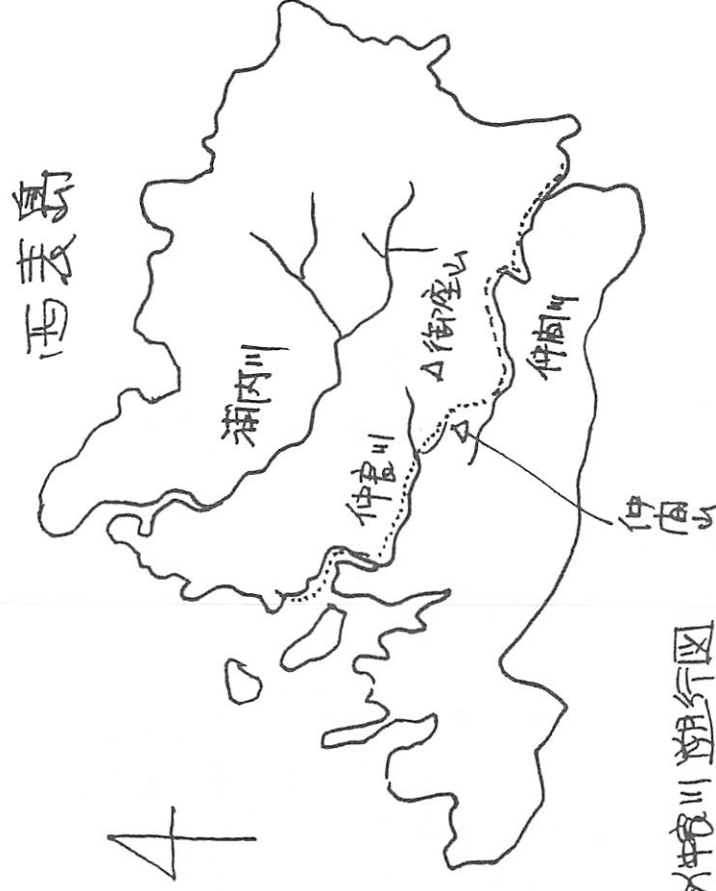
PS. 西表の沢登りは正直もういいかなという気がする。しかし、ウナギ釣りには必ずもう一度行くつもりなので同好者はご一報下さい。今回は作った仕掛けを使う事なく終わってしまったが、リベンジである。



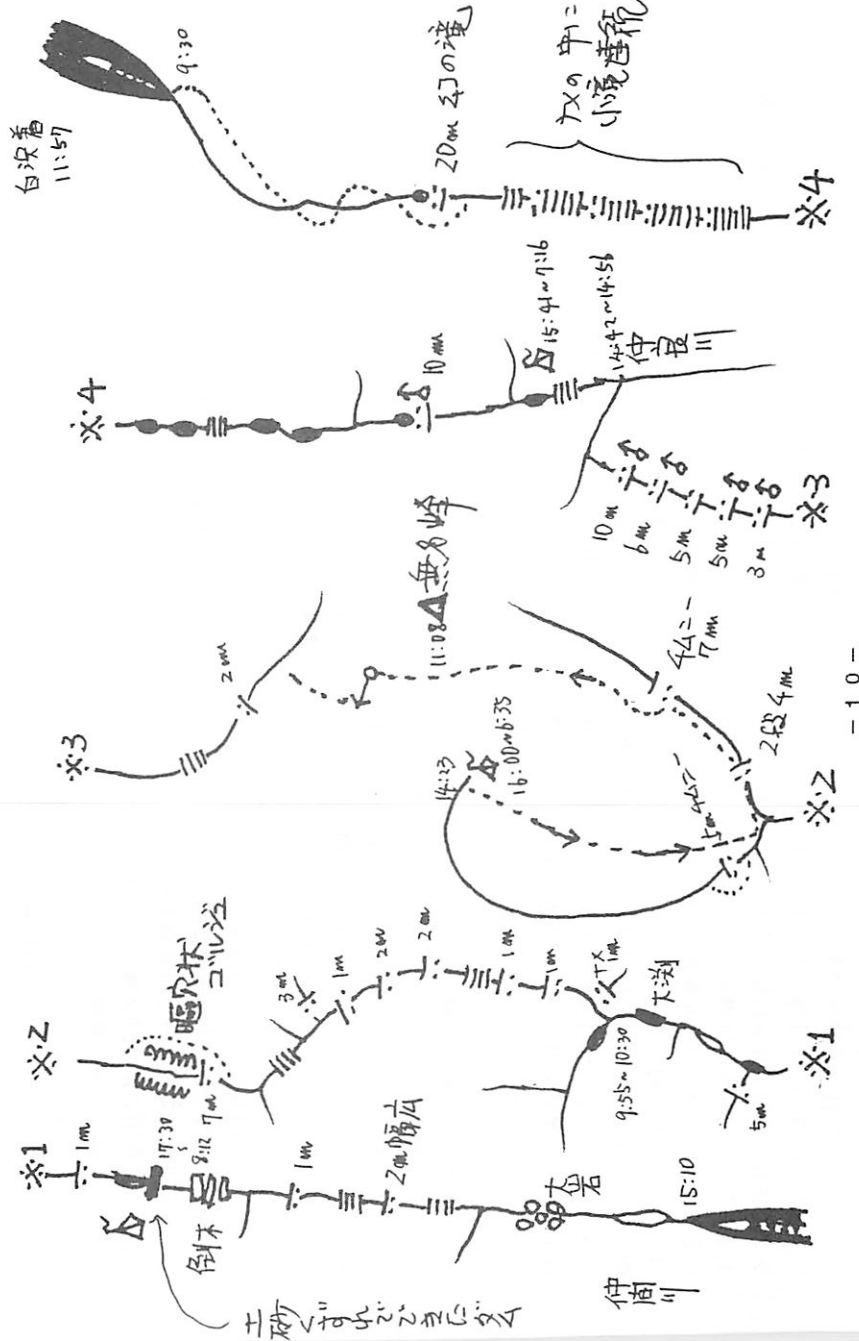
サガリバナが落ちた仲間川をカヌーで行く

仲良^三→仲良^三概念図

作图(本图)



仲商三之仲三三三行四



南アルプス南部縦走

1999. 7. 16～20

パーティ 渡辺聡子 他2名

7月15日

つくばはバス事情が非常によろしくないで、牛久駅発9時31分の常磐線に乗るために同じ宿舎の友人に車で送ってもらうことにした。9時に玄関でと約束したので5分前に宿舎の玄関に出てみると車がまだない。「帰っていないんだ。大丈夫でしょうね。」とちょっと不安になりつつザックに腰掛けてしばらく待つがもどる気配が全くない。絶対忘れていないに違いないと焦りながら公衆電話から電話をかけるとなんと職場の玄関にいた。大慌てで車に飛び乗って、職場で友人の車に乗り換えて駅へ向かう。牛久駅に着いてみるとホームにはすでに電車が止まっているではないか。ダッシュで階段を駆け上がるとなんと、人身事故のため常磐線がストップしていた。こんな時に何てこと!!。とりえず電車に乗り込んで運転の再開を待っていると10分ほどで電車は動きだした。これで一安心。予定よりかなり遅れて新宿駅に到着すると急行アルプスは登山客とサラリーマンではほぼ満員状態だった。なんとか3人とも座席を確保することができ、寝る体勢を整えて眠ろうとするが興奮しているせいか、それとも電車が停まるたびに人の移動があるせいかなかなか眠れない。甲府駅では車両にいた登山者のほとんどが降りていった。

7月16日

それでも眠れていたらしく腕時計のアラームで目が覚めた。辰野駅で降り飯田線の始発を待つために待合室へ。椅子は座り(眠り)心地がいまいちだったので、端の方でマットを広げて横になる。この場所が上野駅辺りで、ザックを持っていなかったらあやしいよな～と思いつつも熟睡。始発電車の入線の案内で目を覚まし、電車に乗り込みまた熟睡。

『次は伊那大島へ。』というアナウンスに起こされてあわてて電車を降りる。駅を出るとタクシーとバスが私たちを待っていて、ここでお金持ちはタクシーで鳥倉林道終点まで行くらくちんコース、そうでない人はバスで塩川まで行く樹林帯急登コースに別れる。もちろん私たちはバスに乗り込んだ。私たちの他にバスに乗っていたのは中年の男性1人とご夫婦の3人だけだった。バスが走り出すと同時にまたまた熟睡。ガタガタ道を通って塩川に着くと年輩の男の人が登山届けを受け取りに現れた。このお方かなり話し好きとみえてなかなか私たちを出発させてくれず、1時間以上のロスをする。しばらく沢沿いに進み、今にも壊れそう

な橋を何度か渡り、尾根取付点に到着。ここで明日の朝の分の米をとき行動水を汲んだ。休憩している間に「写真、写真。」と花を撮ろうとするが、なぜかシャッターがきれない。家を出てくる時にちゃんとチェックしてきたのによもや故障?ここで故障なんてことになってしまったは一瞬レフとフィルム6本がただの錘になってしまうではないか!!。あちこちいじってみたけれど、うんともすんともいわないのであきらめて足を樹林帯へ向けて進めることにした。しばらく行くとバスで一緒だったおじさんに追い付き、その後しばらくは快調に足を進める。樹林帯の中で展望もきかず、延々と続く急登に飽きてきて休憩したところがちょうど急登の終わりだったらしくその後は傾斜も緩やかになりやがて鳥倉林道コースとの合流点にでた。朝は青空が広がっていたのにいつの間にかガスが出てきていてちょっとがっかり。あと一息で三伏峠だ。三伏峠でためにしにカメラを取り出してシャッターをきってみるとなんの問題もない・・・あれあれ???。まあ、いいや結果オーライだ。そうこうしているうちにらくちんコースに行ったはずの見覚えのある人たちがやってきた。話を聞くと、林道終点前でタクシーからおろされてしまい林道をかなり歩いたとのことだった。今日の宿泊予定地である小河内岳避難小屋まで行かなくてはならないので再び出発。峠小屋の裏に出るとお花畑がひろがっていて花が咲きはこっていた。水を汲みにザックをおいてお花畑の中をちょっとくだる。登山道まで戻ってきてザックを背負うと、おもい……。2キロ違っただけでこんなにずっしりくるとは思わなかった。右は大ガレ、左は満開の花畑という対照的な道を進むとやがて鳥帽子岳の山頂へ。山頂を通り前小河内岳を通るころは霧が深く足元の花を見ながら歩いていたがやがて霧も少しずつはれてきて、前方にはこれから行く小屋が見え、後ろを振り返ると富士山や塩見岳を見ることができた。やけに大きな富士山だった。小河内岳避難小屋に着くとジープにジャケットという山に似つかわしくない格好をした小屋番さんと大きな犬が歓迎してくれた。なんでも私たちが今シーズン初めての宿泊者だそうで、水が取れないのにもかかわらず温かいお茶を出してくれ、いろいろ便をはかってくれた。でも避難小屋なのに小屋番さんが常在してお金を取るっていうのもちょっと納得できないような気がするんだけどなあ。まあ、幕営も禁止なので仕方があるまい。この頃にはすっかり晴れて、これから私達が行こうとしているところもしっかりと見ることができた。

稜線が屏風のように折りたたまっていてなかなか面白い。さて夕飯の準備、今日のメニューは明太子スパゲティとスープ。スパゲティをゆでるが、小さなコッフェルでしかも差し水をしながらゆでたのでうどん状になってしまい、ものすごいボリュームになってしまった。公平に分配しましょうと言ってはみるが、ボリュームが多すぎてとても食べきれない。残してはおけないのでお互いに押し付け合う。すきをみて有無を言わずよさそうという勝利への道を学ぶ。

7月17日

暗いうちに起き出してヘッドランプでござござやっていると小屋番さんが電気を付けてもいいよと言ってくれた。なんて良い人だ。小屋番さんは荒川小屋まで無線機を取りに行くと言って出て行ってしまった。食事をとった後出発。外に出てみると青空が広がりつつあった。展望と足元の花を楽しみながらいくつかのピークを越えると道は尾根からそれて、しばらくすると高山裏小屋が見えてきた。小屋を通りすぎてしばらくは樹林帯の中のゆるやかな傾斜の道だったのが、だんだん道はガレてきてしかも傾斜はきつくなりいつのまにかものすごいガレ場の急な登りとなった。今回の山行で最もキツかったところだ。一歩進んではズズッと滑るということを繰り返しながらえっちらおっちら登りようやく荒川岳の前岳にきた。私にとって初めての3000m峰である。コルに荷物をおいて雨具と水だけもって悪沢岳をビストン。あとは荒川小屋まで下るのみ、斜面が花で覆いつくされている中を下り本日の予

定宿泊地の荒川小屋に到着。小河内の小屋番さんから話を聞いていたらしく荒川小屋番さんもとって親切だった。テント泊である事を告げると夜から大雨が降り明日は雨になるからテントは止めて避難小屋に泊まれと言われる。何と無く逆らえない雰囲気になり小屋に泊まる事になった。今日も小屋は貸し切り状態で広々としていた。

一泊二食専用の立派な小屋（しかも水洗トイレ付き）の方はかなり混んでいるようだった。

7月18日

確かに夜中に大雨が降ったけれど朝には止んでいて今日も天気は良さそうだ。これまでは殆どといっていほど人に会わなかったのに赤石までの道はけっこう混んでいた。さすが100名山！。大聖寺平に差し掛かったころ大粒の雨が降ってくるがすぐに止む。青空では無いけれど空は明るく高度感抜群の道を快適にぐんぐん登る。3030mのピークを越えるとテント1張り分のきれいに整地されたビバークポイントがあった。周りは花に囲まれていてなかなかかわいらしい。小赤石を越えコルでは赤石をビストンしているであろう人達のザックがゴロゴロしていた。左手に残っている大きな雪渓を見ながら登り赤石岳山頂に到着すると目の前に聖岳がど〜んと現れた。頂上にある”幸福の鐘”をガランガランならしたあと先を進む。ガレ場を下り、しばらく行くと百間平に出た。ここで私は不思議なものを見たのだけれど、何を見たかは内緒。百間平を越えるとまたまたガレ場のものすごい下り。滑る



聖岳山頂にて

ように歩きながら延々と下るが、行けども行けども下り切った所にあるはずの百間洞山ノ家は見えてこない。この下りで何度しりもちをついたことか……。ガレが終わり樹林帯に入ると沢の水音が聞こえてきてようやく百間洞山ノ家に到着した。見上げると大沢岳がやけに大きく感じる。う〜んこれからここを登るのか、たいへんだねーと話していたら小屋の人が出てきて、大沢岳と中盛丸山のコルまでの近道を作ったからぜひそっちを使ってほしいと言われる。山地図には出ていない水場も教えてもらい出発。新しい道はアザミの中を行くように作られていたため痛い痛いといひながら歩き、コルにでた。名前の通りこんもりとした中盛丸山を越え、小兎岳を越えて水を汲んだ後兎岳へ。兎岳の頂上では雷鳥の親子が私たちを出迎えてくれた。しばらく雷鳥親子と景色を堪能したあと本日の宿泊予定地である兎岳避難小屋へむかった。荒れ放題の小屋の前にテントを張って一安心。私たち以外には誰もいない事を良い事に、ししうど燃やし大会で盛り上がる。

7月19日

起きてみるとあたり一面ガスがかかっている。なんとか今日一日天気がもってくれることを祈りながら出発し聖岳へと向かう。時折霧がはれて、南側は聖の大崩壊地やその奥の山々は覗く事が出来たが、北側にある赤石岳は一度も姿を見せてはくれなかった。がっかり。夜露に濡れたダケカンバの間を登って前聖岳に到着。残念ながらガスがかかっているなーんにも見えなかった。ザックをおいて奥聖までビストンする。前聖の頂上で、百間洞の小屋から3時間半で来たというつわものに会う。つわものの足は傷だらけだった。あれは絶対アザミで出来たものに違いない。頂上でしばらく待っていたけれど霧は全く晴れそうにもないので、あきらめて出発し聖平小屋へ向かう。バッジコレクターの私は聖平小屋で聖岳のバッジを買おうとしたが、残念なことに売ってなかった。絶対売ってると思ってたのに〜。この頃から天気も崩れだし、雨も時おり落ちてくるようになってきていた。足元に咲く花だけを楽しみに歩き、南岳、上河内岳を通過すると今度は大風が吹きだしてきてあぶなく眼鏡を風にもっていかれそうになる。雨と風で視界が全く効かなくなり、ガレ場に残る踏み跡をたどっていくとようやく茶臼の小屋と山頂の分岐点につく。茶臼岳に行くのは止めてまっすぐ小屋に向かい、速攻でテントをはって中にもぐり込みびしょぬれになった服を着替えて一息着く。明日は畑笹ダムまでくだっておしまいだというのもあって、テントのなかは大騒ぎ。女3人で姦しいとはよく言ったものだ和我ながら思う。

7月20日

いよいよ今日が最後の日。朝から大雨が降っている。この日朝から私たちの心を占めていたのはお風呂とビール！。樹林帯の中をわしわしと降りる、降りる、降りる。今回の中で会話がなかったのはこの時だけかも知れない。そして3時間、誰が名付けたかヤレヤレ峠に着く。ここまでくればもう少しだ。峠にいたおばさん達に第一ダムにはシャワーがあるよと教えられ、3人でシャワー音頭を歌いながら降りる。畑笹大釣り橋を渡って山歩きは終了。舗装道路のある畑笹第一ダムのところで下山届けを提出し、シャワーの場所を聞くとなんと今は無いといわれる。ガ〜ン。あと1時間歩いていけばお風呂があるといわれるが、舗装道路を歩くのに嫌気がさしていた私たちはあと1時間がんばるかそれともくさいまま新幹線にのるか真剣に悩む。その時『もしよかったら連れて行ってあげますよ。』と神様のような声がする。みると昨日隣にテントを張っていたおじさんだあ!!。とってもありがたいお言葉だけれどもあまりにくさいわたしたちが車に乗ってしまつては申し訳ないと辞退すると、なんとおじさんも同じ日に入山していたと言うではないか。そういうことならとありがたく車に乗せていただきお風呂のある所まで一緒にさせていただいた。その上、この神様のようなおじさんは帰り道だからと東海道線の駅まで私たちを送ってくれた。もう大感謝。後ほどおじさんにはお礼の品をお送りさせていただいた。

3人とも持っていったフィルムはぜーんぶ使いきり後日、『自画自賛大会』を開催したが、いつの間にか「大爆笑、けなし合い大会」に変わってしまっていた。

(渡辺 記)

丹沢小川谷廊下

1999. 7. 25

パーティ L 古山正文、笹平孝、菊地光夫、吉田仁、渡辺聡子、木村一

今年ACC-J 茨城に大型新人が人会しました。1人は体も大型、血液型もO型の渡辺嬢、もう1人はクライマーの風貌を備えた吉田君、期待の新人会員である。2人共入会后沢登り、岩登りゲレンデに数回通うが、今年は天候に恵まれず沢登りの本チャンは今回が初めてである。同行者はACC-J 茨城の最強メンバー古山、笹平の両氏、ACC-J 茨城のアイドル菊地氏、岩と雪と風をこよなく愛す木村の総勢6名で、目的地は丹沢山塊玄倉川流域小川谷廊下で水に戯れる計画である。林道の最奥穴ノ平橋の付近で天幕を張り、小宴会後仮眠。翌朝6時起床、沢登り初経験の吉田、渡辺の2名は張り切っているのが伝わってくるが、経験豊富な菊地氏は余裕さを感じる準備風景である。穴ノ平橋の付近から小川谷に下降し遡行するが、先行パーティは同じ茨城の沢屋らしい。最初に出てくる大岩に流木がかかった滝は右側を古山リーダーがトップで登り、期待の大型新人2名が続くが、水流の中へ体が振られ苦労している様子を見かねた菊地氏が、渡辺嬢のお尻を押し上げて助けている様子は先輩、後輩の温かい指導であるが、このような事を街の中で行った場合、菊地氏は軽犯罪法違反で逮捕される事は間違いない。しかし、理性と教養に溢れた彼はそのような事は絶対に無いと断言できます。小川谷の第1関門で水の洗礼を受けた我々にとって、この上に続くゴルジュ帯は積極的に水と戯れ、水に親む遡行になり、期待の大型新人

2人も小川谷を満喫している様子が窺える。小川谷の良さはこのゴルジュ帯にあるのかも知れません。途中、小川谷名物の大岩が出て来ました。昔は地下足袋に草蛙の装備でこの大岩の正面突破を試みた記憶が蘇ってきたが、今回は大岩左側の腐ったシュリングに頼って乗越し、続くゴルジュの中を水に親しみ濡れながら、ナメ滝では滝壺に落ちる姿に大笑いしながら登行を続けると、小川谷の主2段30mの石棚が現れる。この石棚をザイルを使用して乗越すと最後にF12トイ状の滝が出てきた。この滝はザイルを使用して古山氏がトップで取り付き、吉田、渡辺の2名が後続し、これを横から、斜めから写真を撮りながら登ると上部にはゴーロ帯が続き、小川谷の遡行も終わりに近い。更に上部の堰堤上で登山道に出て約1時間の下降で穴ノ平橋に到着。こうして夏の暑い日の1日を水に親しみ、水と戯れる事が出来た。帰路、丹沢湖までの河原には家族連れでテントが花開き、バーベキューを楽しんだり、玄倉川の流れて水浴を楽しんでおり、どこかのキャンプ場のような感がある。後日この玄倉川ではキャンプ中のテントが急激な増水の為に流され、多数の犠牲者が出る事など露知らず楽しんでいる様子。大型新人吉田、渡辺の2名は満ち足りた顔で、帰路の車中で次回の山行計画等の話をしているのを聞くに頼もしい限りである。今後の活躍が期待出来る。

(木村 記)



小川谷を行く

巳ノ戸谷

1999. 8. 1

パーティ L 本図一統、菊地光夫、吉田仁、渡辺聡子、高木博行

梅雨も明けた盛夏、奥多摩へ沢登りに行く事になった。自分にとっては5月に膝を痛めて以来の山行なのでバテないか心配だ。9時に下妻を出発、奥多摩の派出所に登山届けを提出し、ついでに帰路の林道歩き短縮の為に本図さんのバイクをデポさせてもらう事にするが、既に12時を過ぎておりチャイムを鳴らすがお巡りさんは寝てしまったのか出てこない。少しでも歩きたくない自分が二度三度とチャイムを鳴らすと、バジャマ姿のお巡りさんが出てきて親切に対応してくれた。無理やり起こしてごめんなさい。紙面をお借りしてお詫びします。無事バイクをデポし林道奥の車止めにて小宴会後就寝となる。翌朝は日原川の遡行から始まる。すぐに小さなゴルジュになり行き詰る。兩岸ともツルツルでへつれそうもない。なんとかへつろうと抵抗を試みるが結局はドボン。眠気も吹っ飛ばしたさに悲鳴をあげる。巳ノ戸谷に入ると最初に出会う巳ノ戸の大滝20mの直登は望めず左岸から高巻く。次の4m滝はガイドによるとちょっとしょっぱいとある。何がしょっぱいかというと朝からシャワークライムになるのだ。本図さんと吉田さんは健康的な高巻きをする。自分が躊躇していると菊地さんが果敢に落水の中に突っ込んでいった。菊地さんが登り切ると渡辺さんもチャレンジし登ってしまった。一人取り残された自分も滝に打たれるしかなかった。食べ物もシャワークライムも余りしよっぱいと体に悪い。次のF2(6m)で唯一ロープを出す。自分がトップで登りボディビレイでビレイしていると、登ってきた本図さんが下の二人はぶら下がるかもしれないからという。ボディビレイから立ち木でのビレイに切り替えビレイするが吉田さんと渡辺さんは余裕で登ってくる。この滝を最後に小滝が適度に現れる程度の平凡な溪相となる。地図上にあるゴルジュは何処にも無い。やがてワサビ田跡に到着。野生化したワサビを取り冷麦を茹でる。ワサビの香りが何ともいえない。しかし楽の後に苦が待っているのは人生も沢登りも同じなようだ。昼食後、水の潤れた沢を稜線目指してひたすら登る。久々のツメにバテバテになる頃ようやく登山道へ飛び出す。立派な鷹ノ巣小屋を経由し鷹ノ巣山の頂上で休憩。中日原への途中、稲村岩?という巨大な岩壁が現われる。標高もだいぶ低く



大滝にて…左から菊地、高木、吉田、渡辺
なってきた。派出所のバイクも近い。

車止め(7:00)ー稜線(12:30)ー中日原(15:30)

(高木 記)

滝沢下部ダイレクトルート～ 滝沢第三スラブ～ドーム壁横須賀ルート

1999. 7. 31

パーティ L 古山正文、笹平孝

このルートは数年前の10月に告君と登るつもりで、取り付まで行った。すでに1パーティが取り付いていて、順番待ちとなった。結構寒く待つ間フリースを着た。1時間半ほど待った9時になっても、先行はなかなか進まなかった。このままでは登り始めても時間切れで、途中でビバークとなるだろうと言う事で、中止にした。翌日は、衝立のA字ハングルートを登るため（結局雨の為2p目で敗退）中央稜の基部まで来た時、ドームの基部に黄色のツェルトと人影らしいものが見えた。昨日のパーティーは、1日で抜ける事が出来ず、ビバークしたらしかった。我々は、取り付かなくて良かった。

この時期は日が高いので前回よりも早く取り付けるし、長く行動できるし、仮にビバークとなっても暖かいし、気が楽だ。むしろ、水筒の水が無くなる事が心配だ。本谷の雪渓沿いには取り付きには行けそうもないので、雪渓からテールリッジに移り、本谷バンドを渡り、本谷を下って、取り付く。本谷は去年の上部の崩壊による岩が沢山たまっていた。下部ダイレクトルートは2p目から人工が混ざり、グングンと高度を上げる。3p目も人工で抜けるが、濡れていていやらしい。

階段状の4p目を終わると、Y字河原に到達。ここからは正面の滝沢第三スラブにはいる。F1のクラック沿いを3pほど登る。残置のハーケンは少ない。F2は濡れたスラブ状で、左壁沿いを登る。F3はぬるぬるの垂壁の上、引き出し状の岩質で悪く、あぶみで乗り越す。F4はあぶみで右上して越える。F5は乾いている小壁。ぬるぬるのF6を直登し、ボロボロの右壁を乗り越して右側のスラブに出た。更に3pで、中間リッジのギャップ上。ここからは草付の登りとなるが、慎重にスタックカットで3pブッシュ帯を登る。途中草付が剥がれなかった個所があった。4p目、笹平君はドームを避けるように、右のルンゼに入ってしまう。左の笹の中にはバケツ状の踏み跡がドームに向かって伸びているのである。わざと右に行ったとしか考えられない。ルンゼの先は岩壁に囲まれ、行く手を阻まれるのは明らかであった。どんずまりの岩壁のクラックをA0の岩登りを強いられて、ドーム基部の右端に出た。1p左にトラバースしてドーム壁横須賀ルートに取り付いた。4pでルートを登り切り、更に1pでAルンゼの合流点に到達した。ここで、登攀具をしまう。この終了点から、登山道まではわずかで、夕



滝沢下部ダイレクトルートの登攀

暮れの中トマの耳を越えた。すでに二人とも水筒には水が無く、喉が渇き切っている。谷川岳山頂付近には水場がない。水場は巖剛新道に入ってからしかない。とにかく水場を目指して西黒尾根を下る。巖剛新道分岐でヘッ電を出した。記憶に在った水場のルンゼは完全に涸れていた。ここがだめならほとんどマチガ沢出合い付近まで下らなければ水場はない。我慢が限界に達した頃、ようやく水場に着いた。二人とも鯢腹水を飲み、一ノ倉沢出合の駐車場に戻った。翌日も登る予

定であったが、笹平君が疲れて登れそうもないと言いつ出したので、そのまま家に戻ることにした。

一ノ倉沢出合(5:00)ー取り付き(6:30)ーF6上(11:30)
ードーム基部(15:30)ー終了点(17:30)ー一ノ倉沢出合
(20:30)

(古山 記)

中高年登山教室《八ヶ岳》

1999. 8. 7～8

パーティ L 本図一統、菊地光夫、その他46名

5月の中旬頃だったろうか、集会后、本図氏に8月の最初の土、日で八郷町で主催する登山教室の指導員をしてくれないかと、持ちかけられ観光気分引き受けたが、平均年齢は55歳位と全くの中高年の登山である。尚、今のブームであるオバチャンがほとんどであった。でも本図氏は人にやさしく、オバチャン達には大変気を使うのでうってつけだと一人関心する。

場所は、八ヶ岳、赤岳と決まる。6月中旬に下見山行を役場の担当者(坂入氏)と、もう一人の指導員の上村氏とあいにくの雨ではあったが、美濃戸を出発し、赤岳鉱泉～行者小屋より地蔵尾根～赤岳～文三郎

新道～美濃戸を1日工程でチェックをしてくる。

後日、出発前に参加者全員に集まってもらい、本図指導員より山での注意点や装備の注意点など登山の講習会を開いた。講習後、簡単な経歴を記入してもらい後日班を3班に分ける為の資料にする。その結果、1班は多少の登山歴のある健脚の人達、17名を菊地が受け持った。2班は上村氏が受け持ち、このグループは多少元気ではあるが、高年齢の人が多いグループとした。3班は、本図氏の班でオバチャン達で60歳を越えた人達のグループとした。総勢48名で大型観光バス1台の定員となる。



行者小屋前にて

当日は、八郷町役場前に5:00集合で高速を使い昼頃には着く予定ではあったが、何分に8月の最初の土曜日で中央高速が混雑して車が動かない。現着が2:30頃になってしまった。今日の予定は赤岳鉱泉までなので約3時間の行動であった。天気は雨が降ったり止んだりと少し変わった空模様であったが何とか行けそうなので各班に別れて歩き出す。各班の連絡としてトランシーバーを使い間隔を空けて歩く。途中、一人の女性の登山靴の靴底が剥がれてしまい、本図氏に緊急処置をしてもらい、赤岳鉱泉まで頑張ってもらった。6時頃には全員赤岳鉱泉に着き、予約を入れておいたので各自室に入って7時頃には夕食となった。食事は山小屋とは思えないくらい立派な物で、量は少なく無駄がない。確か、おかわりは出来たと思う。量はお子様ランチなみであった。私は入浴はしなかったがおフロまでであった。トイレが変わっていて、トイレトペーパーは下に捨てないで、備え付けの箱に入れて後で小屋の人が処理するようであった。

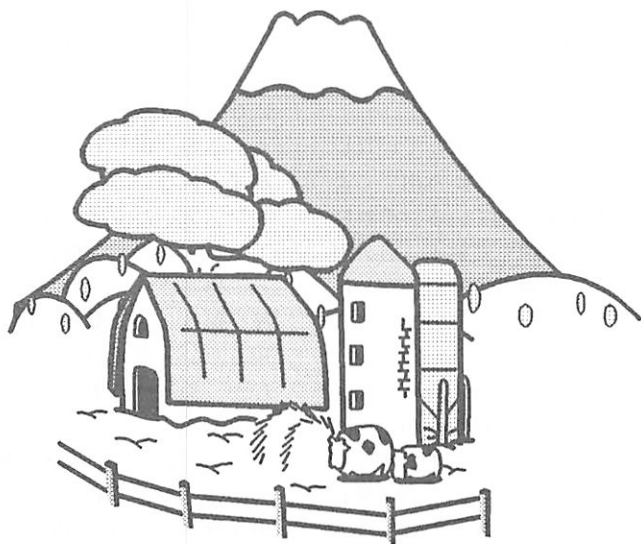
翌朝は一番最初の組で朝食を取り、AM6時出発。これより中山乗越を経て行者小屋へと向かう。ここに重い荷物をデポして、行動食と弁当、防寒具と最少の物だけを持ち、地蔵尾根への急登となる。ここには、何ヵ所かの鎖場があり足元には十分に注意してくださいとの本図指導員よりの話があり、気を引き締めオバチャン達も頑張っていた。赤岳石室を経て赤岳山頂へ。山頂到着後万歳をする者、弁当を食べる者、高山植物

を見る者、思い思いの休憩を取った。

下りは文三郎新道を経由して行者小屋へと向かう。下る途中に高山植物の女王であるコマクサが群生していた。ここでもオバチャン達は感激して写真をパチパチと撮っていた。文三郎新道はよく整備されており、鉄の梯子や網状の階段が目につき歩きやすい。行者小屋到着後、登頂の記念写真を撮る。これより3時間ぐらいで美濃戸口到着。帰り道近くの温泉で汗を流し、八郷町に9時前後に到着した。

今回の山行は、自分のペースでなくゆっくりゆっくり歩く初心者ペースなのでかえって疲れると本図指導員は言っていたが、17歳~73歳と年齢層の幅も広く、中高年登山で女性が大半で気を使うところもあったとは思いますが、何よりも怪我一つ無く全員が2899mの赤岳山頂に上がった事が一番の喜びだと思った。

(菊池 記)



魚ノ沢

1999. 8. 8

パーティ L 古山正文、渡辺聡子、吉田仁

『あっち～！。なんでこう毎朝暑いんだ！』。つう事で先週に続き今週も沢登りに。メンバーは、Prof 古山さん、渡辺嬢、俺の3人パーティ。場所は白砂川の支流、魚ノ沢。白砂川は大黒の頭付近を水源とし花敷温泉で長笹川と合流する長大な渓谷だ。そして今回登る支流の魚ノ沢は、10m前後の滝の連続で上流部は50mの大滝があるという。しかも全部直登可能。すげー楽しめだ！（でもちょっとと不安でちゅ）。

9:00に下妻を出発。気合い十分で、一路野反湖を目指す。が、山道をクネクネと登って行くと、フロントガラスに何やらボツリボツリと。花敷温泉から右に林道に入る頃には本格的に降ってきた（あ～あ～）。そして、現地到着。雨の中テントを設営。Prof 古山さんは、車中ビバーク。俺と渡辺嬢でテントに寝る事になった。川のせせらぎを聞きながら気持ち良く就寝。「山やっていて良かったなあ～」と思うひと時だ。でも暫くするとサラサラという音から、ザワザワザワという音に変わってきた。雨で水嵩が増しているかも知れない。又、しばらくすると今度はゴウ～ゴウ～ゴウ～という音に変わった。

『やばい！増水してんじゃねえの～』

しかもその音は直ぐ近くから聞こえる。（落ち着け、落ち着け）

『ん！待てよ。何か変だぞ。』

よく聞くとその音はテントの外からじゃない。中から聞こえる。そう、その音（爆音）は隣でシュラフに包まり*（注）ジュゴンと化した渡辺嬢の発するイビキだった（汗）。

そして朝、雨は上がりずしかし川は増水していないようだ。Prof 古山さんと渡辺嬢は車から出てこようとはせず、行きたくない光線を発している。それに負けずとこちらも行きましよう光線を発射！。五分五分だ。こうなれば仕方ない先手必勝！これ見よがしに支度を開始する。『ガチャ、』と車のドアの開く音。

『じゃあ。行きますか？……。勝ったようだ。』

7:00に出発。白砂川の河原を出合に向け、歩き始める。すると何やらコンクリートの建造物が。一同『あれあれ、ダムじゃん。聞いてないよう！』ルート図を見直したってダムのダの字もでちゃいない（最近できたのね）。このダムを右往左往しながらもドロドロ、グチャグチャの壁をへつってまもなく出合に到着。いよいよ俺にとって3本目の沢、魚ノ沢に入沢だ。出合は伏流気味で馬の小便程の水流しか流れていない。沢登じゃなくてガレ場登りになるんじゃないじゃある

まいなど、一抹の不安を感じながらも進んでいくとやがていい溪相を見せ始めた。この頃になると雨も止み、時折日差しも出るようになって、森の中をサラサラと流れる沢を登っていくのは誠に気持ちが良い。やがてゴォ～という音が聞こえてきた。12mスダレ状の滝を始めとする連瀑帯だ！。最初の12mの滝は狭いおちょぼ口な落ち口から一気に末広がり落ちてくる。さぞマイナスイオンが発生しているんだろう。

以前テレビで滝の周りにはマイナスイオンが発生していてリラックス効果があり、ストレス解消に良いと言っていた。でもちょっと待てよ！。沢屋のみなさんよ～く考えてみて！これは例えば観光とかで滝見物だけならもちろんマイナスイオンをたっぷり吸収してもストレス解消になるかも知れないけど沢屋の我々はこの滝を登り切る事であって、それはそれで好きでやっている事とはいえ、多少なりともストレスになるんじゃないだろうか？。という事は、+-=0っていうこと（ん～、よく分かりません）。

この12mの滝は右から巻いて、落ち口直下のリッジにへばりつき一跨ぎ。俺の股の下はものすごい勢いで水が落ちていく。莫大なパワーの水洗便所の上にいるようだ！。そして小滝の連続。左俣くの字8mの滝を横目に順調に沢を詰めていく。この先はしばし単調な登りが続いた。まもなく奥の二俣に到着。第2の連瀑帯に突入していく。8mCSの横をよじ登り、黒滝10mを左から高巻き2mの滝（？）をねじ伏せ、8mの滝で水をかぶり4mでスリップ、5mでへろへろになった（疲れた）。しかしこんなもので終わらせてくれる魚ノ沢じゃない。トボ図を見るとまだ半分位しか来ていないではないか！。しかもこの先も滝の連チャン、まったく楽しませてくれます。この辺りまできてスロースターの俺はやっとエンジンが温まってきたって感じ！。ガンガン行くで～。3～5mの下っ端の滝を蹴散らして登って行くについにボスキャラが姿を現した。大滝50mナメ滝だ！。『ん～、どう攻め込むか。やっぱり男らしくド真中から行くしかないでしょう』

『やや、細かい。意外に細かいゾ！。こいつめ、でかい図体しているわりにはいやらしい奴だ』（何か凄じ所を登っているように聞こえるかも知れませんが、Prof 古山さんはここを簡単に登りきり、すでに俺は上からビレーされてます！（爆笑）

『ああ～何て事だ』俺は滝の真中で完全にスタンスを見失ってしまった。俺の横から登っていた渡辺嬢は、

すでに登り切って上で『ああ、楽しかった』などとぬかしている。恐ろしい奴だ。俺はといえば、今だ小康状態。この危機的状況からどう打破しようか、いまだ悩んでいる。ふっと上を見るとProf古山さんシャッターチャンスとばかりにビレーしながらカメラを構えている。“マズイ！”滑ってロープにぶらさがっている所なんて撮られれでもしたら一生いわれ続けられるだろう。更に悪いことに足がブルブルしてきた。フリクションで行くしかない。意を決して一歩踏み出す（滑らない）。2歩踏み出す（滑らない）。『おぉー！。何とか行けそうだな』ソールで岩にへばりついた苔を剥がしながら慎重に登る。そして何とか完登。さすがはボスキャラです。よかったぜ！。後は、入門山を目指して草付きを登るだけ。しかし楽勝と思いきや、ここが意外と悪かった。傾斜がきついうえに草付きも薄い。ビギナーの俺は、回りを見ず目先の草付きだけを見て登っているの、知らず知らずのうちに草の無い方へ、無いほうへと行ってしまい、又も立ち往生（全く何やってんだか）。半分開き直った俺は、長期戦の構え…。かといって草が生えて来るまで待っている訳にもいかずどうしょう。するとどうだろう。上からすると蜘蛛の糸が下りてくるではないか。そう、見かねた古山さんがお助け紐を投げてくれたのです。かたじけないと、そのロープをガシッと掴み、何とか脱出に成功。はい松帯の中に逃げ込み、藪を漕ぐ事10分程でドンビシャ入門山の頂上にダイレクトに到着。ガッシリ握手を交わし、祝福の完登（お疲れ様でした）。頂上には夫婦のハイカーがいて、悪態をつきながら登ってく

る俺を見て笑っていた。だって本気で辛かったんだもん！。

（吉田 記）

*（注）ジュゴン…

アフリカ東海岸からマラッカ海峡、フィリピン、沖縄にかけての海に棲む海獣。体は灰色で下面は白い、ほ乳類（綱）カイギュウ目、ジュゴン科（三省堂、生物小辞典第4版）より。

補足すると、このジュゴンとは人魚伝説の基になった海洋生物。これに例えるというのは、ある意味女性に対しては誉め言葉である（たぶん）。



魚ノ沢

金木戸川 双六谷本谷

1999. 8. 13~16

パーティ L 古山正文、笹平孝、吉田仁、渡辺聡子

Scene-1 おかしい、こんなはずでは・・・。

初めてのお泊まり付き沢遡行です。どきどきわくわく。午前3時過ぎに双六ダムに到着しました。私の予定では満点の星と今日が極大日であるペルセウス座流星群が迎えてくれるはずだったのに、空には何も見えません。おかしい、こんなはずではないのに・・・。車止めの所にはすでに7~8台の車がとまっていてテントも何張りか張ってありました。先客を起こさないように静かに且つ速攻でテントをはって睡眠。これ以降『おかしい、こんなはずでは・・・』が連続して起こります。でも、まさかまさか4日間とも大雨に降られるなんて・・・。

Scene-2 決まりを守る者は得をする。

本来ならば入渓地点近くまで車で行けるはずなのですが、工事のため手前10kmの所までしか車が入れなかったのかかなりの時間歩く覚悟で出発します。車両進入禁止の標識をずらして入ってきたのでしょうか、何台か私たちをタクシーが追い越していきます。お客を降ろして戻ってきたタクシーに乗せてもらうよう頼みますが断られてしまいました。40分も歩いたでしょうか、工事車両が通って行ったと思ったら何と止まって私達を乗せてくれました。施錠してある車止めを越え、タクシーを使った

人達を追い抜き、あっという間に広河原に到着です。打込谷手前まで山道を歩く予定でしたが、かなり時間短縮ができたため沢におりて遡行を開始します。天気は晴れ、岩は白く淵は緑、汗ばんでいる身体に沢は心地よくとても快適な遡行が続きます。

Scene-3 滑ったり転んだりぶついたり、そして呪文は『タコの吸盤』。

右に左に渡渉をくりかえし、岩をショルダーで乗り越えたり岸をへつたり時にはゴルジュを高巻いて楽しい遡行が続いたのですが、私はバランスをとるのがとても下手らしく足を滑らせては岩にぶついたり淵に落ちたり一人すったもんだしてしまいます。

私の歩き方があまりにひどかったのでしょうか、見るに見かねた笹平さんが効果的な呪文を教えてくださいました。その呪文とは、『足の裏はタコの吸盤』。それ以降『タコの吸盤』、『タコの吸盤』と唱えながら歩きますが、下手っぴいな私には効き目は薄く、山行が終わる頃には両足ともにあざだらけとなってしまいました。

Scene-4 2人の手は魔法の手。

太陽が姿を見せなくなったと思っていたら1時をまわ



双六谷

ったところ突然スコールのような雨が降ってきました。大雨の降る中偵察に行った笹平さん、吉田さんによるとどうやら現在地は打込谷出合の手前ようです。シートをはって雨宿りをしながら止むのを待ちますが1時間以上も降り続き、2時30分をまわったため今日の行動は終了しビバークが決定。古山さんと笹平さんの手によってみるみるうちに手持ちの装備と枝や石を利用したホテルが完成されていきます。この移動式ホテルは若干の雨漏りがあった日もありましたが居住性は抜群で、自分の部屋の布団で寝ているだろう錯覚さえ引き起こしました。夜半に目を覚ました私は、自分の部屋に人がしかも3人も寝てる！とあせって大声をだしそうになり、危うくみなさまの安眠を妨げるところだったことを白状しましょう。

Scene-5 逃がした魚は大きい。

まだ太陽が顔を出していた頃、先頭を歩いていた古山さんが岩魚の影を見つけました。足元を泳いでいってパシャっとはねたそうです。このとき岩魚のサイズは確か25cmでした。古山さんは捕まえればよかったと後悔していました。

寝床を整え薪を集め火を興した後、笹平さん、吉田さんは岩魚釣りに出かけて行きました。古山さんは近くで糸をたらししていますがどうやらつれない様子。ここでさっきの魚のサイズは30cmになりました。お米をといた後、借りた竿を使ってわたしも試みてみありますが釣りというものを初めてやる私に釣れようはずがありません。2人が魚をかかえて戻ってくることを祈りますが、願ひもむなくしき今晚はふりかけ定食になってしまいました。この時においしいご飯を炊く事に根性を出す事をひそかに決意します。人の背丈よりも大きなキャンプファイヤーを囲みながらのお食事でした。話の中であれあれ？何と35cmの大岩魚に変身です。

Scene-6 天然岩魚はおいしい。

前日の焚き火の残り火を利用して火を起こし朝食の準備をしていると、何と前の晩から置きっぱなしにしてあった吉田さんの竿に岩魚がかかっているではないですか！。早速串をさして塩焼きです。あとは火を消して出発するのみといったところで岩魚が香ばしく焼きあがり、みんなでおいしくいただきました。

Scene-7 ほんとにあった倒木の山。

おいしい岩魚に満足して出発です。打込谷のすぐ手前の所まで来ると昨日山道を歩いて入渓したというパーティに声をかけられました。本日の予定である蓮華谷出合までその人達の会の人は10時間以上かかり、しかも大雨洪水警報が出ていると告げられ、ちょっといえかなりビビりました。日影十根と日面十根とは日が

あたる壁とあたらない壁というところからつけられたに違いないと思うのですが、朝から曇りのせいか確認出来ません。首をかしげながら通過します。今日はダークグリーンに見える水を見ながら進むと右岸からセンズ谷が合流。センズってなんだろう？一粒食べれば体力回復、病気もけがも治る仙豆（せんず）という豆が出てくるマンガがあったけど、まさかねなどとバカな事を考えながら、でも呪文を唱える事は忘れずに歩いて行きます。

さっきまでの大岩と廊下帯はどこへやら、一転して開けた河原に出ました。どうやら下抜戸広河原に到着のようです。1981年の遡行図にはここに”倒木の山”があると記されていますが、なにせ20年近くも前の事、ほんとにあるのか半信半疑で足を進めると、なんと！あるではないですか！！しかも両手をまわしても足りないような大きな木が整然と山積みになっていました。これは81年からある木なののでしょうか、それとも自然に木が更新されているのでしょうか？自然の力に感動しつつも、この倒木でキャンプファイヤーをしたいという衝動にかられます。

Scene-8 もしかしてキンチヂミ？

倒木の山を横目に下抜戸を過ぎるとまたまた廊下帯に突入です。前に行く笹平さんの手を借りたり、古山さんの肩を借りたりしながら遡行を続けていきました。左岸を歩いていると目の前に大きな岩につきあたってしまいます。ここは笹平さんが越えた後、ロープでのザックを引きあげてもらってから空身で登っていきました。蓮華谷まで10時間というのが頭にあったせいかこの時点ではここがキンチヂミだとは全く思いもしませんでした。キンチヂミってどんどころなんだろうとドキドキしながら歩き続けていくと、あれあれ？蓮華谷との出合に来てしまいました。時刻は1時30分です。ここへ来てようやくさっきの所がキンチヂミであった事が解ります。小休止の後遡行を続けていたら今日もまた雨が激しく降り出してきました。蓮華谷を越えたという事でビバークポイントを探しながら歩き、適当な高台に幕営しました。

Scene-9 今晚のおかずはとっても豪華。

高台の下には野生のクレソンが生えていました。ホテルを建築後一息ついて、笹平さんは岩魚釣りに私は焚き火の番をしながらクレソン摘みです。コッヘルいっぱいクレソンをゆでていると笹平さんが岩魚を一匹釣って戻ってきました。すばらしい！！さっそく身はお刺身にアラは味噌汁に変身です。豪華な夕飯に下駄をうちくつろいでいるとまたまた大雨が降ってきました。「明日は停滞かな。」古山さんが呟きます。何て事でしょう！トランプとウノを車に置いてきてし

まいりました。

気象予報士が天気図を書くとき明日も天気は悪いとの事で、丸一日停滞が現実味をおびてきます。眠りについた後も雨音で何度か目が覚めました。私が目を覚ますくらいだったのですからかなりの大雨だったにちがいないことでしょう。

Scene-10 早起きは岩魚の得。

5時ごろ目が覚めてみると予報に反して青空です。早々に起き出した笹平さんの後についてわたしものそのそと動き出します。笹平さんが火を起こしている間に竿をかりてちょっと釣りのまねをしてみました。すると手応えあり！！まさにビギナーズラックとはこのことです。大喜びで笹平さんにご報告(^_^)。

何と無く気分は停滞モードでしたが、天気がかずれる前に出来るだけ進んでおきましょうという事で出発です。次第に岩も少なくなってきた、ゴーロを4時間も歩いたでしょうかやはり大雨にあってしまいました。遡行終了点まであと2時間くらいの地点まできているので今日はここでビバークし、明日下山する事に決定です。

Scene-11 下界の出来事。

岩影を利用したホテルを建てた後、着替えて一息つきますが雨はざんざん降ってきます。ラジオでは玄倉川の鉄砲水で人が流されたニュースをやっていました。思わずそばを流れている沢の流れをみつめてしまいます。おまけに来る時に利用した高速道路が土砂崩れで通行止めだというではないですか。いったい下界では何が起きているんでしょう・・・？

試しに天気図を書かせてもらい気象予報士に提出すると、等圧線の書き方がなっていないとたしなめられます。予報によるとやっぱり明日の天気は悪そう・・・。

Scene-12 右？左？

いよいよ今日は最終日。一晩中降り続いた雨は朝になっても止まず雨具を着ての歩き出しです。1時間ほどで進行方向が東から北に変わり終わりが近いことを知らせてきます。さらに進むと二俣に着きました。水量は1:1のようですが、左俣の先に遡行図にある二俣があるようにも見えます。古山さんが偵察に行っている間、3人で現在地の確認を試みます。私達は左に進めば遡行図に載っている二俣があると判断し、すっかり左に進む気になっていましたが、やがて戻ってきた古山さんの口からでた言葉は「右。」でした。ありゃりゃ。

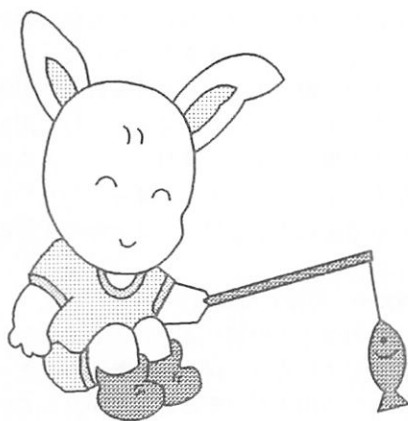
Scene-13 あ～あ、終わっちゃた。

右に進むとみるみるうちに水量が減っていき、踏み

後を辿って行くとやがて双六池が、そして双六小屋が見えてきました。晴れていれば北アルプスの山々が見えるはずだったのですが霧がかかっていて何も見る事が出来ません。ちょっと、いえかなりがっかりです。

靴をはきかえて小池新道を新穂高温泉へ向けて下り出します。延々と下る登山道の途中でも雨に降られ、新穂高のバスターミナルに到着した時の私達の心配は、濡れていてしかも臭い（であろう）私達をタクシーが乗せてくれるかという事でした。恐るおそる運転手さんに聞いてみると快諾です。双六ダムに到着した後は、運転手さんに教えてもらった温泉で汗を流し一般道を通って無事に帰ってきました。

(渡辺 記)



遠く海外からEメールで近況報告がありました。この場をお借りしてその報告を掲載します

カリフォルニア・クライミングスクール体験記

1999. 9. 25~11. 22

遠藤和彦

9/25. 19:30、ベイエリア発。下り車線が大渋滞。皆遊びに出かけるようだ。ストックトンでバーガーキングに寄る。ここのバーガーが一番うまいような気がする(最初はワッパーと呼ばなかったが)。ところで、車にはカップホルダーが付いており、これまで缶ジュースを入れても今一つ収まりが悪いので、作り悪いなと思っていたのだが、本日謎が解けた。なんと、バーガーショップで受け取るジュースの紙コップにピッタリ合うように作られていた。じつはカップホルダーには、合うところが2段あるのだが、大きい段の方はラージサイズの紙コップにピッタリ合うことがその後判明して、これまた唾然としてしまった。

ストックトンからカリフォルニア4号線をひたすらベアバレーへ。道は牧場のど真ん中を突っ切っており、家らしき物は何も見えない。道は等高線そのままにアップダウンを繰り返すので、ジェットコースターに乗っているみたいで気持ちが悪い。道の作りも違うようだ。日本なら切り通しを作るところだろう。

23:30、ベアバレー着。School提供のLodge泊。皆寝てしまっていたので、書き置きをたよりにベッドに潜り込む。

9/26. Intermediate climbing school その2 クライミング用語

朝目を覚ますと、周りからは英語の会話が聞こえた。朝っぱらから英語かよ、と少々食傷気味である。気を取りなおして起床。朝食をとり、自己紹介をしてからクライミングの場所に歩いて出かけた。用語はOn Belay、Off Belay、Rope up、tension、Loweringなどで簡単であった。了解したときはI got you, というようなのだが、「ガッチャ」としか聞こえない。

インストラクターのボールは、夏はラフティングガイド、秋にクライミングインストラクター、冬はテレマークの先生とうらやましい生活をしていた。生徒は子供、若者からおじさんおばさんまで、日本よりは年齢層が広いようだ。そんなに特殊なスポーツではないようで、気軽に楽しんでいる様な気がした。良くパートナーを組んだのは、UCパークレーから来たAbuだった。そういえば、街のクライミングジムも(人工壁)もの凄く混んでいた。

成果はというと、久しぶりだったのでトップロープで

5. 8がやっとだった。カムやナッツの使い方を一通り教えてもらった。こちらの乾いた硬い花崗岩なら、良く効くことだろう。夜の食事になると、とたんに会話が分からなくなるのが辛かった。

翌日も車で別の場所に移動して、クライミングレッスンを受けることになった。ボールと車に乗り込んだ。ボールは車中のPAC De LuciaのCDをめざとく見つけた。パコの曲を知っている人は、そうざらにはいない。フラメンコも弾けるそうだ。普段はブルースを弾いているという。どんな曲を弾くのだろうか? 年齢も同じ31だそうで、テレマークをやったり嗜好が同じなので急に親しくなった。

全くレベルの低い話だが、登れたのは本日も5. 8までだった。5. 9以上はいつ登れるようになるだろうか。ところで、近くには湖があって、クライミング終了後皆泳ぐという。服のまま泳ぐのかと思っていたら、なんと20代と思しき男も女もみんな真っ裸になって泳ぎ始めたのは唾然とした。うーん、同じ人間かと思っていたら、持ち合わせるバックグラウンドは全く違うのかもしれない。久々にカルチャーショックをうけた。こちらの文化の方がより自然体なのかもしれない。

帰りの車で、テレマークにも是非来てくれということになった。約束事や願いなどが未来に実現して欲しいときには、人差し指、中指をからめて、ある形を作るそうだ。我々はどうだったっけ。だれかに近づいて欲しくないときに、そんな形をしなかったかな。

10/2~3. =Yosemite Half Domeへ=

ヨセミテは相変わらず混んでいた。オーバーナイトパーミットが取れず、バレー内で宿泊もキャンプも出来ず、日帰りでハーフドーム強行。往復11時間。帰りはヘッ電下降。疲れた。

2つの滝を登りハーフドームへ向う。ここまでは以前着たことがある。以前よりも水量がかなり減っている。さんざん歩いてハーフドームのコルへ。ハーフドームは、45度位ある花崗岩の壁に無理やり鎖が付けてあった。ハイカーはそれをたよりに登る様になっていた。上の方はかなり怖い。そこを、みなよじ登っていた。しかし、上からの眺めは格別である。足下がすっぱり切れ落ちている。そこをクライマーが上がって来た。4ピッチで日

帰りで出来るそう。いつかはエイドクライミングもやってみよう。

下山後、少し南のワオナというところまで車で行ってキャンプを張った。ヨセミテ内にキャンプサイトを押さえるのは非常に難しい。何とか空きのキャンプサイトを見つけた。夜の11時であった。

食料を買う時間が全く無かったので、翌朝は飯を炊いて、塩と胡椒を降りかけで食べた。結構いけたので不思議である。少なくともアメリカの不味い食べ物よりは遙かに旨かった。

10/15。=Mt. Whitney 登頂記=
ベイエリア（サンフランシスコ）夜10時発。2時間ずつ交代交代で運転。5号線では、ずっとオリオン座を見ながら運転した。星座を見ながらでは、行けども行けども見え方が全く変わらないのでいらいらする。しかし、運転中に流星が見えてしまうという画的な高速道路であった。

10/16。5号線をひたすら南下、ローンバインに朝の5時着。8時に歩行開始。廻りは岩肌だらけ。大きな木は見あたらない。しかし、まばらにある木々はきれいに紅葉している。3時間ほどでout post camp 標高3000m。明るくとても良いテン場。ここに泊まる誘惑を捨て、さらにひたすら歩いて3700mのtrail campへ。湖沼を大規模かつ無機能的にした様などころである。少し頭がふらふらする。

10/17。6時に目を覚ますと、すこし頭が痛かった。テントをそのままにして、ホイットニーへ。景色は、まるで湖沼から穂高に登る時の様だ。2時間で稜線。同行者は、皆ばて始めている。迫力のある岩壁があちこちにある。ここから、セコイアナショナルパークが一望できる。しかし、木が全くなく、砂漠のような山脈である。どこにセコイアがあるのだろうか？それにしても、ジョンミュアートレールはこんな不毛の山々を巡るのだろうか？（ヨセミテから、ホイットニーまでがジョンミュアートレール、1ヶ月かかるそう）さらに1時間ほど歩いて山頂。4400mはそんなにきつくなかった。以前行ったモンブランの高度順化が残っているのだろうか。そんなことあるわけないか。山頂でゆっくりして、下山。一気にOut post campまで下り、泊。

10/18。下山後、再び8時間掛けてベイエリアへ。（帰りはヨセミテを越えた）左にシエラネバダを見ながらのドライブは、なかなか良かった。

=最後に・アメリカンのバックギアと植生=

山やりたての頃、ザックに物をあまりぶら下げないように教わった様な気がする。実際、木に引っかかったり、なくしたりと余りよいことはない。しかし、アメリカンは全く逆。皆、うっとうしくなるくらい、ザックにシュラフ、コップ、マット、何でもぶら下げている。こちらは気候のせい、鬱蒼とした森林がほとんどない。いっ

ぱいぶら下げても、木に引っかかる心配もない。それに道も広い。だからだろうか？

・椅子文化とテン場

テン場で休んでいても、なぜか落ち着かない。どうも、みんなテン場でずっと立っているからのようだ。なぜだろう。こちらは椅子の文化。山では椅子がない。座る習慣もない。だから、皆テン場で立っているのだろうか。疲れるだろうに。それにしても、海あり山ありうまいワインあり、カリフォルニアの生活は楽しい。

10/29。=レッドウッド=

大学の山サークルRed Woodというところに、この年にして入れてもらった。今週は皆でクライミングに出かけた。企画者はアルゼンチンから来たカルロス。国際色豊かだ。金曜夜に集合し、ブライアンの車チェロキーでLake Tahoeの近くのLover's Leapに出かけた。ブライアンはPHDの学生だという。こちらの山屋も日本の山屋と同じ様な車に乗るようだ。4時間ほどで到着。今回学生達とつき合って、どうも彼らは若者言葉を喋るようだ。とくに「cool」を連発するのだ。ちょっと良いなと思うと「cool」と言うらしい。キャンプ場で寝ることになったが、誰もテントを出そうとしない。いきなり地べたにマットを敷いて皆寝始めた。うーん、こちらではこのスタイルが当たり前のかなあ。やはり気候の関係だろうか。雨が殆ど降らなければ確かにテントなしでも快適に夜を過ごせる。実際外で星を眺めながら寝るのは非常に快適であった。いくつか流れ星を見た後に眠りについた。

10/30。朝、日本での山行の様にラーメンを作っていると、他に同じくラーメンを食べようとしている人がいた。しかし彼らの作り方は、お湯を沸かしてインスタントラーメンに懸けるだけなのだ。麺が硬いだろうに。この寒いのに冷たいコーンフレークを食べる人もいるなど、食べ物に関しては全く無頓着だ。

本日はナッツやカム類の設置、セルフレスキューの練習と充実したプランが組まれていた。ブライアンは経験豊富なクライマーのようだ。その後、つぎは「プーシキング」をやるといふ。プーシキング???よくよく聞いてみると、ブルージックでの登高練習であった。語源が同じでも発音のなんと違うことか。

10/31。本日はリードの練習をすることになった。私は初めてのリードである。トップロープで確保してもらいながらのリードをした。ナッツ類を岩にセットしながら登るが、どれが岩にはまるか非常に選択が難しい。慣れるには経験が必要である。後から登ってくるときに見てもらったら、いくつかはマージナルなアンカーだそう。クライミング中の言葉は今回は全く問題にならなかった。基本はbelay on、belay offである。つづいてはトップロープなしのリードを実際にやってみることになった。グレードは5.3。今回は

六角形をしたヘキサセントリックと呼ばれるものが、結構ピッタリとクラックにはまった。ピッタリとはまったときは、パズルを解いた時のような感じである。しかし、外れないかどうか心配で怖い。5, 8とか5, 9とかは、いつリード出きるようになるんだらう。また、エイドクライミングを少し教えてもらったりと、今回非常に充実した内容をこなすことができた。

帰りは結構遅くなり、In and Out というハンバーガー屋で夕飯を食べた。ハンバーガー屋では、ここがベストだという。彼らも旨い不味い分かるのだろうか。たしかにマクドナルドのものよりは旨いと思う。大抵の人は大食いでも2個食べていたのには参った。まあ巨体を維持するのだから仕方ないかもしれない。

11/9. 近くのNorth Face の店で山の映画上映会があるとのことで、行ってみた。Elena tinという雑誌の宣伝の一環の様である。どんな内容かは全然知らなかったのだが、大変面白くcrazyな内容だった。「こいつらって陽気なアホだ!」と思わせるような内容である。スキーでは、とある山にヘリで降りた後に、45度はあると思われる雪壁を雪崩に巻き込まれながら延々の直滑降をしたり、崖から飛び降りたり、カヌーでは、わざと激流につこんで、ロックンロールの如くカヌーと共に激流の中でぐるぐるダンスをしているのである。そうかと思うと、スノーモービルでこれもまた崖から飛び降りたり、自動車を飛び越えたりしていた。あの重いスノーモービルを、バイクの如くスラロームさせているのは驚いた。自転車でも、崖から落ちる系の遊びがメインであった。森の中に木で細い道を造って、マウンテンバイクを走らせて遊んでいる人々もいた。他にもラフティングのシーン等もあり、かなりの激流で転覆する際には、なぜか皆大喜びだった。会場も大喝采。アメリカ人て、こんなめちゃくちゃな遊びが好きなようだ。テレマークスキーがアメリカで復活したのも、何か同じノリのような気がする。アホだけど、そんな奴等の考えつく遊びは楽しい。

11/21~22 =セコイアナショナルパーク=
2回目のRed wood tripに行ってきた。
今回のリーダーはHuman Biology Department 2年生のRobyn。今回の場所はセコイアナショナルパーク。土曜の5時30にスタンフォードに集合。自己紹介で名前はいつもトラブルを起こす。Kazuhiikoなのだが、アメリカ人は??? Kazooと略してなんとか皆が呼べるようになる。長い名前の人はどうしているのだらう。

次に荷物分担。食料は大量に買い込まれていた。日本の山屋の様に重さは一々気にしないようである。それにしても凄い量だ。車3台で出発。車の数が足りないのので私まで出す羽目になった。一応チェーン買ったが280

馬力FRで雪道は大丈夫なのだらうか。

ところで、私の車は荷物を積むとたった2人しか乗れなかった。人は乗れないは荷物は積めないはガソリンは喰うはで、やはり山向きではない。まあ、最初はこんなグループ山行に行くなど全く想定していなかったわけであるが。結局ブライアンと、2人で乗り込む事になった。ドライブ中はなかなか会話が弾まない。外人相手だし彼もどちらかというと無口のようだ。5号線をひた走り途中のフレズノでマクドナルドに寄る。名前を聞かれてFirst name はトラブルのもとなので、名字のEndoと答えると、ブライアンに名字はEndoと言うのかと聞かれた。なんでもEndoというスラングがあるらしい。彼によるとマリファナの事を指すそうである。全く変なスラングに該当してしまった。スラング辞書を調べても全く載っていなかったのだ。相当なスラングなのだろう。やつは何で知っているのだ。Endoとは、内側とかいう意味のはずなのだが。

12時に現地に到着。雪もなく無事到着した。ゴールデンイーグルバスを購入した。50\$払うと、国立公園が1年間フリーバスになる。

準備して出発。雲行きは怪しい。それにしてもアメリカンの足は長い。長い足で力任せに登っていくので、我々アジア人が着いていくのはやっとなのである。いつもの1.5倍のペースで登らなければならない。ロビンも、筋肉がついているか分からないような華奢な体にもかかわらず、ガシガシ登っているのには参った。何か違うエネルギー源を食べているのかと思わずには居られない。ヘトヘトになりかけた頃に、ようやく本日のテントサイトに到着した。

ところで、学生達との会話は楽しい。物理のPHDの学生がニュートリの質量を測定していたり（彼によるとカミオカンデは有名な所の様だ）、また機械科の学生はソーラーカーレースで鈴鹿に出たこともあるそうだ。ポットからお湯を注ぐときに、注ぐ高さを変えながら、このレイノルド数（流体力学で使う）は幾らだろう?などと言い合っているのは、全く我々日本人の理工系人間と同じノリである。

今回、エアーマットを初めて購入したのだが、これは楽だ。テント下の凸凹が全く気にならない。おかげで熟睡することが出来た。翌日は、空身なので楽であった。Twin Lakesというところまで往復した。最後に、セラネバダ山脈が一望出来るポイントがあった。前回行って来たホイットニーも。

(遠藤 記)

ドウドウセン&裏越ノセン（その1）

1999. 8. 13~15

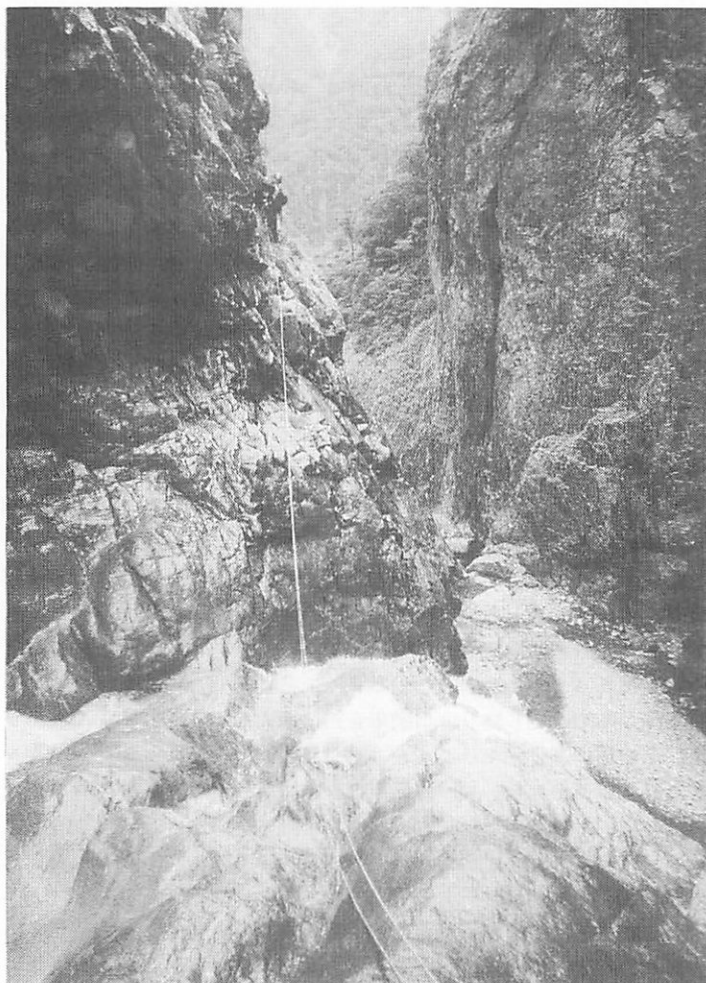
パーティ L本図一統、高橋弘（無所属）

13日。ついにドウドウセンアタックの時がきた。このアタックに先立って、どの位の装備を用意したらよいのか迷った。ドウドウセンを近くから見たことがないので見当もつかなかったが、もし物量作戦になったら今回の完登は無理だろうからと当初の予定よりかなり減らした。馬力のある高橋さんは「これも持ちますよ、あれも持ちますよ」と言ってくれて虚弱体質の私には嬉しかった。林道終点までは我が愛車モンキー（バイク）で行く。なんと高橋さんもモンキーの姉妹車であるゴリラを買って持って来ていたのだ。図体の大きい私と高橋さんが、モンキーとゴリラに乗って林道をぶっ飛ばす姿はなんと滑稽なものだったろう。しかしお盆というのに他の登山者は皆無だ。きっと天候不順による雨のため、計画を中止したパーティもいるのだろう。途中、道の崩壊場所はバイクを持ち上げる。こんなことができるのもモンキーとゴリラだからこそである。

マワット下ノセンとマワットノセンは右岸から巻く。高橋さんは直登したことがあるそう。まあいずれは登らなくてはならない滝である。来年でも登ってみようか。巨岩地帯は概ね右岸に行く。昨年来たときにビバーク予定地を探したが、裏越ノセン下には適当な所が見つからなかった。でも今日は巨岩地帯が終わった所の右岸にビバーク跡があり、ここをベースとする。川底よりは3m高く、大きな増水でもなければ耐えられそうだ。

時計を見ればまだ午前中である。裏越ノセンのルート工作に行く。この時はまだ裏越ノセンは未登で相当に困難と予想していた。滝正面から偵察すると、左岸のオーバーハング上に続く草付きバンドがあり、これをルートにとることにする。高橋さんは、正面オーバーハングに2~3ヶ所ある弱点クラックの何れかにしたかったようであるが、ここは私の意見を通させていただいた。

1P目、高橋さんトップで取り付く。確保用のハーケンを1本打ち、ザイルがスルスルと延びていく。やがてコールがかかり私が行く。草でスタンスが隠れているものの易しい。2P目、つるべ方式なので私が行く。2m下降してトラバースし水流を渡る。水量の多



裏越のセン…2P目の登攀

いときのトラバースは絶対不可能。失敗すれば滝壺まで空中を吹っ飛ばす。この上右岸に行くか左岸に行くか迷ったが、ここで私は自分の目を疑った。左岸上部に見えるのはハーケンじゃないのか？それも2本仲良く並んで見える。裏越ノセンは未登と信じていた私は、全身の力が抜けていくのが分かった。高橋さんを上げて話すと「さっきのビレー点にもありましたよ、触っただけで折れちゃいましたけど」の弁。こうなったら我々は右岸を行きましょと高橋さんに声をかける。3P目、Ⅲ級のフェースを登って姿が見えなくなった。ハーケンを打つ音が聞こえる。「悪いのかな」とビレーする手に力はいる。やがて「いいですよ」の聲がかかり登っていくとⅣ級のフェースに、これでもかという程ぶち込んだハーケンがあった。抜くのに一苦労したが、ふと左側を見ると又ありました錆びた残置ハ

一ケンが。あ〜あ、やはり初登攀ではなかったのだ。垂直の壁を強引に登り、そのままトップに立つ。4 P目、D滝落口をシャワークライム（と言っても飛沫を浴びる程度）し、そのままC滝落口まで左壁を直上する。5 P目、C滝落口を左岸に移り、傾斜の落ちたスラブをベタベタと歩きA滝右壁のクラックを登って登攀を終了する。所要時間約2時間で呆気なく終わってしまった。A滝は少し離れて入るので裏越ノセンに入れるか意見の別れるところかも知れないが、我々はそこまで入れて裏越ノセンとした。

ベースに戻るにはまだ早いので、ドウドウセンのルート工作をすることにした。前衛滝は右壁を簡単に登れた。左折すると今まで見えなかったドウドウセンの下部が展開した。全面壁に囲まれて2段になったG滝が落ちている。想像していたほどの迫力は感じられず、ドウドウセンの名前の由来となったといわれるドーンドーンという音は聞こえてこない。川崎柴笛クラブの記録でも“ドーンドーンとかすかに聞こえてくる”と記述があるが、写真で見ても今日の水量より多かったとは思えないのに、本当かいな？と疑ってしまいたくもなる。川崎柴笛クラブのとったルートはノーザイルでも行けそうである。私はこの壁をみてドウドウセンは登れると確信した。壁には弱点がたくさんあり、それを辿れば最低限の装備で登れるような気がしたのである。取付は滝中段に延びているバンド以外には考えられず、直登しようとするクライマーなら10人中10人がそこにルートをとるに違いあるまい。

「さあ帰りましょう」と高橋さんに声をかけると「え！もう帰るんですか」と言う返事が返ってきた。時間もまだ早いし、ルートを少しでも延ばしたかったらしかった。でも私は今日はこれ以上深追いたくはなかった。ベースまでの下降ルートの状態に少し不安があったくらいで、その他これといった理由はなかったのであるが、虫の知らせというやつかも知れない。「はい、今日はこれで帰ります」と迷わず答えた。その直後、前衛滝の懸垂用ハーケンを打っている間にポツポツと雨が降り始めた。登攀用具を日向窪対岸にデポして、裏越ノセンを高巻ルートから降りている頃にはドシャブリになってしまった。水量は先程の5倍にはなっているだろう、釜は波立って怖いくらいの中を胸までの徒渉で越えた。水嵩はみるみるうちに高くなり、我々がルートにしたバンドのはるか上より水が空中を飛んでいる。ベースに着くころは徒渉などできる状態ではなかった。益々降りが激しくなり、幕営地も背後からの流入で水浸しになってしまったが、木の枝を多量に敷いて高床式にしてなんとか寝床を確保した。増水した裏越ノセンは凄い迫力だった。

14日。目が覚めると雨は止んでいる。水量は減ったもののドウドウセンアタックができるほどには引いてはいない。そのうち又降ってくる。今回の降り方はゲリラ的で、止んでいたかと思うと急にドシャブリの雨がくるので怖くてとてもゴルジュには入れない。停滞とする。ラジオの報じる天気予報は明日も明後日も同じとのこと。今回はだめかも知れないと諦めムードになってきた。夜になって益々風雨が強まり寝床の下は水が流れている。



裏越のセン…4 P目の登攀

フライを張っただけの安普請の我が家は風には非常に弱いのだ。増水が心配で、夜なか中私と高橋さんが交代で起きていた。丹沢では河原に張ったテントと人が流されたという。私達は川床より3mも高くても心配で寝られないというのに、無知ということは恐ろしいことである。

15日。昨日と同じように、どういうわけか朝は雨が止んで水も引いている。明日まで待っても登攀は望めず下山することにした。高橋さんはデボ地点を別な場所に変えるということで一人で出ていった。高橋さんが帰らないうちにドシャブリになってしまったので、少々心配したが、まもなく元気な姿が見えたので一安心した。ペー

スを撤収するうちに凄雨になるも強行に下山することにした。しかし、あつと言う間に増水し、下降は困難が予想された。でも流石、地元の高橋さんである。こんなときの為にルートを確認してくれていたのである。一回の徒渉は強いられるが、あとはマワットノセンもマワットノセンも通らず下山できたのであった。

川古温泉(6:24)ー林道終点(7:02~7:14)ー徒渉点(7:48~7:59)ー幕営地(10:46)ー裏越ノセン取付(12:36)ー終了(14:40頃)

(本図 記)

伊勢沢

1999. 8. 22

パーティ L 本図一統、古山正文、吉田仁

まず、最初に、首都高速道路公団に物申す。土曜の夜に工事をするのはやめてよ〜!。6号線から、C1~4号線高井戸までの間3ヵ所も工事しやがって!!。ナニ〜、集中工事だって、運転しているこっちは集中力が続かないんですけど(あ〜、すっきりした)。という訳で、予定より1時間もオーバーして神ノ川林道の車止めに到着。広場に車を停め、高台のこぎれいなトイレの脇で臭寝?就寝。

翌朝、快晴、快眠、快便でスタート。さて、今回の沢は、という裏丹沢の代表的な川。神ノ川の支流、伊勢ノ沢。5つ星だ。俺は裏という物がこのうえ無く好きである。裏社会、裏街道、裏ビデオと、どれをとっても男心をくすぐる要素をしこたま秘めている。特に裏ビデオと言ったら……(軌道修正)。

道中の車内で知った事なんだけれど、伊勢ノ沢の目玉は50mの大滝だ。しかもこの滝は、直登出来るという(あの〜、僕、初心者なんですけど)。この話を聞いていたらお腹が痛くなってきた、早退しようかしら……。

30分ほど林道を歩き、曲橋の先で急坂を木に掴まりながら神ノ川の河原に降り立つ。ちょっと下流に戻ると直ぐに伊勢ノ沢出合だ。沢に入るといきなりF1の登場。『おいおい、いきなりかい。ぜ〜ぶん、はえ〜な』って感じである。(F1と言えば早い物の代名詞。仕方ないか!)2段10mを左から登り、暫く行くとF2に到着。これも左から登る。ガイドブックにはヌメっているって書いてあるけど、意外にフリクション利いてくれて楽しく登る事が出来た。そして三ノ沢、四ノ沢を左に見ながらナメナメを通過していくとF3ー3段15mが見えてきた。

『アレー、F3って2段じゃなかったけ』よ〜く見ると『んん〜!、一番上に見えるのはF4ー50mじゃないすか!。本当に伊勢ノ沢さんたらセッカチネ!!』と言

う事であつと言う間にF4到着。

『ヒャ〜、デッケ〜!!。本当にこれを登るんですか?』思わず誰もが口にしちゃうセリフでしょう。登るんであれば、トップをはる事になるであろうprof古山さんのチェックが入る。

古山氏『本図さん、ちょっと悪くないんですか?』

俺 『ウン、わるい、わるい!』

古山氏『見てくださいヨ、ボロボロですよー!』

俺 『あつ!ほんとだあ〜、ボロボロだー!』

古山氏『ハーケン打っても抜けちゃうんじゃないんですかネー?』

俺 『ん〜、抜けちゃうな〜、きつと』

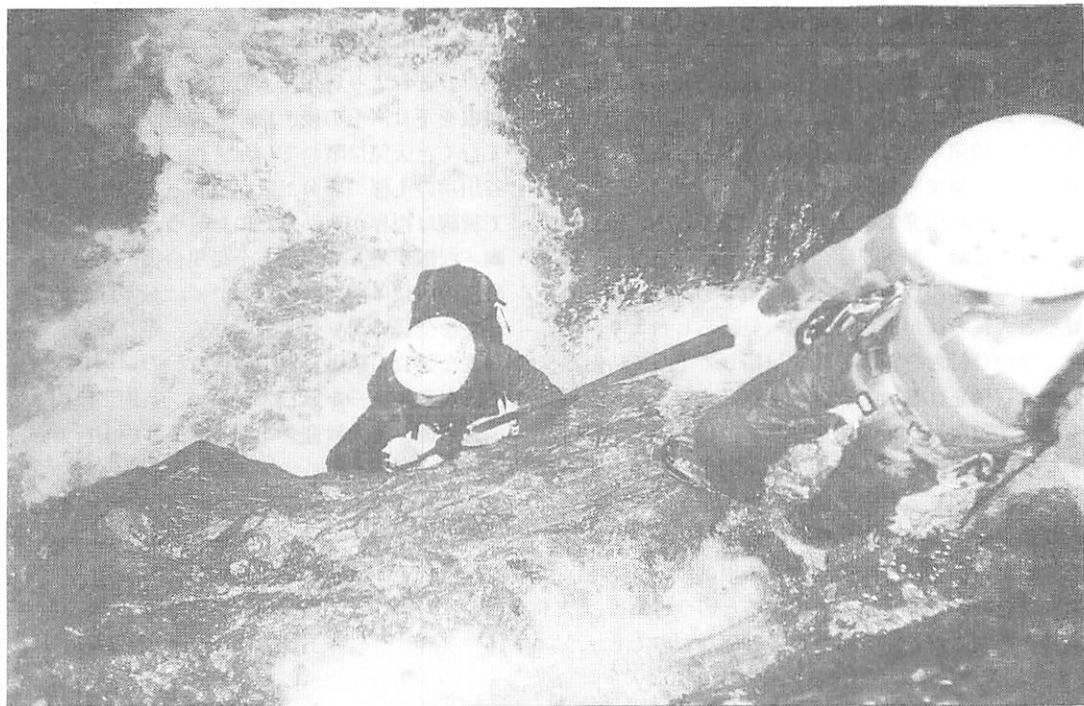
俺は、大滝の迫力に圧倒されて、prof古山さんの言葉をなぞってばかり。まるで九官鳥みたいです。そして本図隊長の最終決定を固唾を呑んで待つ。

本図氏『巻くか!!』

“たっ、助かった。”そうと決まれば話しは早い。身も心も軽やかにスキップで、下のルンゼに降りて行く。しかし、巻くっていったて50mの滝を巻く訳だから一筋縄じゃいかない(現に2ビッチ、ザイルをだした)。ルンゼを40m程登って左にトラバース。そして浮き石だらけの尾根を登るが、かなりイヤラシイ。落石を起こさないのが不思議な位だ。しかし、それはあつてはならない事。何故って、俺の下からは、本図隊長が登ってきているのだ。一粒のミスも許されない状況だ。ここを慎重に越え、ブッシュ帯を歩くと滝の落ち口に降り立った。そ〜つと下を覗いてみるが、お股がスースーするので、直ぐに遡行開始。まもなく二俣に到着。ここで大休止。コースタイムでは4時間とあるが、半分の2時間で着いた(スバラシイ)。ここから先は、水量も徐々に減っていき、F6、10mを越えると次第に水も消えてガレ場登りになった。ヤブをこぐこと15分くらいで縦走路に

飛び出した。ここで下の駐車場にいたハイカーにばったり。下で見た時は、何の変哲も無いおばちゃんハイカーも、数々の困難を乗り越え、緊張感から解き放された目で見ると、とてもキレイなおばちゃんに見えるから不思議だ。この人達としばし談笑した後、神平山から風巻の頭経由で、車へと戻った。

(吉田 記)



お助けロープで直登する吉田

幽ノ沢・V字左ルート

1999. 8. 29

パーティ L 古山正文、笹平孝

幽ノ沢は今回で2回目の山行になる。右俣側は初めてで、カールボーデンは前から気になっていた所だった。カールボーデンの登りは赤ペンキがあり、迷うこと無く行くことが出来た。沢のすぐ脇に行くので水の心配はなかった。取り付き手前でロープを出して、右俣リネをトラバースした。

要の所から右ルートと左ルートに分かれていて、赤ペンキは右ルートへ導いていた。要から左寄りに易しいスラブを登っていく。3級のスラブなのでどこでも好きな所を登れる感じで、難しい所に入り込まないよう注意した。支点は少ないので、岩を利用したりハーケンを打ち足してビレィをした。こんな感じの所を4ピッチほど登ると大滝の壁に着く。岩は全体的に濡れていて、黒くなっていた。気合を入れて取り付いたが、足元が今にも滑りそうでなかなか進まない。中間部からアブミを出してほっと一息つけた。しかし、この先には支点がありませんので、まともにアブミも使えない状態だった。非常に悪いフリーありありで、しばらくの間、壁にへばり付いてい

た。必死の思いで大滝を越えた時は、精神的にヘトヘトになっていた。ここに来る前に、左ルートは濡れていていやらしいよと聞いていたけれど、ここまで厳しいとは夢にも思っていなかった。大滝を越えたら尾根を目指して右寄りに上がって行き、3ピッチほどロープを出して石楠花尾根に出た。ここでロープをしまい10分ほどで堅炭尾根に出た。

(笹平 記)

谷川岳・東尾根（新人歓迎山行）

1999. 8. 29

パーティ L 本図一統、木村一、生井一男、吉田仁、渡辺聡子、菊地光夫（ACC-J茨城）
名雪博二、松原丈夫（ACC-J東京）

今年、入会してきた新人の吉田君、渡辺さんの谷川岳の初デビューにマチガ沢のシンセン右俣から東尾根のルートが決まり、東京より2名、茨城より8名と総勢10名の大勢の会員が集まった。

早朝、6:00出発でマチガ沢の出合で古山、笹平組と別れ（彼らは幽ノ沢・V字の左ルートに行った）、厳剛新道に行く。朝のうちは天気は快晴であった。約30分も登ると大粒の汗が流れた。第一見晴らし台より、あまり良くない草付きを正面の滝を目指して下っていった。大滝の所は右側を高巻いてシンセン沢に入り、コルを目指して登る。急なガレ状の所を登り、凹状の幅広い草付きの所をザイルを出し新人の人達を本図氏がリードする。シンセン岩峰の辺りより雨というかガスがかかり、視界が良くない。ルートを見失いそうになるが、所々に赤ペンキで○印が付いていてルートを外す事は無い。でも、一般道では無いので赤ペンキを付けるという行為は、単なる落書きと同じだと思うのだが、如何なものでしょうか？。

第2岩峰は多少悪いがノーザイルで越え、第1岩峰へ。ここは右を巻き、急峻な草付きを登るとオキノ耳直下に出た。その先の岩稜を左に巻き気味に行くで国境稜線に

出た。これより谷川岳へ登り、肩の小屋を経由して西黒尾根を下り、その後、厳剛新道をマチガ沢の出合に降りて行くと天気は晴れていた。出合から振り返ってみると谷川岳の上部の部分だけがガスっていた。なるほどそれで稜線は視界が悪かったのだろう。少し待っていると、幽ノ沢隊が帰って来た。全員集合後、全員で水上にある町営の温泉に行き、山の帰りには滅多に飲めないアルコールを全員でジャンケンをして、帰りの運転手を決める。厳選な勝負の結果、日頃の行ないの良し？本図氏及び古山氏がアルコール無しのウーロン茶担当に決まった。

入浴後、新人歓迎会を開く、楽しい山行であった。

（菊地 記）



谷川岳頂上にて…左より木村、名雪、渡辺、菊地、生井、吉田、松原

ドウドウセン&裏越ノセン（その2）

1999. 9. 4~5

パーティ L本図一統、高橋弘（無所属）

谷川に行くのに高速なんて使ったことないのに、少しでも多く寝たい一心で渋川から高速に乗る。沼田付近で雨が降りだし、月夜野では本降り、猿ヶ京では大降りになった。なんとついていないんだろうと自分の不運を嘆きながら川古に向かう。高橋さんは既に到着しており、明日への希望は捨てずに一杯やって早々に寝る。

4日。明け方はまだ降っていたので又寝直す。朝には止んだが川は増水している。一般通行なら十分に可能であろうがドウドウセンでは無理である。今日が無理だとすると明日だけではどうにもならず帰ることも考えた。高橋さんはトンビマイタケのある所へでも行ってみませんか誘ってくれた。しかし諦めがつかず、明日早朝出れば、少しはルートが延ばせるだろうとアタックしてみることにした。そうと決まれば、これからやることは決まっている。車で酒の買い出しに行く。高橋さんは、なんとカセットコンロまで買い込んできた。午前中から道路の縁にシートを敷き酒盛りが始まった。といっても私は余り飲めないのですぐにアウト。高橋さんの強いこと強いこと、かなりの酒豪である。通る車は、朝から何事ぞとスピードを落とし奇異の目で見ていく。ふと自分の足を見てみると、何かがくっついていて。私には何だかすぐに分かった。川内ではだいぶお世話になった奴、そうそうヒルちゃんであった。川古温泉にはヒルがいるので皆さん気をつけて下さいね。夕方には水も平水に戻り、明日への期待を胸に7時には寝てしまった。

5日。2時起床。真っ暗な中バイクを走らす。徒渉点の少し手前でビバークしているパーティがあった。相手も暗いうちから食事の準備を始めており、かなり真面目なパーティだが、その時間に歩いている人もいるのには相手もビックリしたことであろう。いくらなんでも暗い沢の中を歩くのは危険が多すぎる。徒渉点で明るくなるのを待つ。天気はやっと晴れてくれた。なんとか沢底が見える明るさになったので出発とする。先日のベース跡で忘れ物を回収し日向窪出合に無事到着。川古温泉から2時間50分で来てしまった。

準備を整え7時にはドウドウセンにアタック開始。すぐ上の滝は腰まで水に浸かり左から、次の滝は左から簡単に、次の前衛滝は右を直登する。さていよいよだ。気を引き締め「じゃ、お願いします」と高橋さんに声をかけ本図トップで取り付く。1P目、G滝左壁はルートにならない。右壁のG滝中段に続くバンドを登る。すると予想していた通りあった。何かといえばあれですよ、あれ、残置ですよ。裏越ノセンに残置があったのだから、ドウドウセンに無いわけがないと確信みたいなものがあった。

た。川崎柴笛クラブのルートとは違うので、我々と同じようにドウドウセン直登を目論んで来た輩が前にもいたのだ。ホールドだけにぶら下がってトラバースするなど、少々アクロバティックなことなどもしてテラスに這い上がる。テラスには夥しい数の残置ハーケンボルトがあった。ビレー支点と思われる物が3カ所もあるのだ。左の支点は上に行くためのビレーポイントに間違いない。その上にもハーケンが連打されていたが、5m上で行き詰まり下降したらしく、カラビナが残置されており、その上にルートは延びていなかった。真ん中の支点は、左の支点がG滝の瀑水を浴びるため寒くていられず、それを避けるためのものであろうか。右の支点は下降用であろう。この支点を使って下降しても相当に振らないと釜の上に出てしまう。だから他の2支点では振り切れないのである。2P目、高橋さんトップでヌルヌルの垂壁に取り付く。かなり苦勞しているようだが、私は真ん中の支点でビレーしているので姿が見えない。そのうちザイルにガクンとショックがきた。落ちたらしい。A0で登っていてハーケンが抜けたとのこと。こんな所は溪流タビでは厳しいのではなかろうか。トップを溪流シューズの私と交代する。なるほど、ここはちと悪い。リスを見つけてはハーケンを打ちジリジリと上を目指す。結局3本使ってバンドに出、それを左斜上して灌木でビレーする。ここがドウドウセンルートの核心部である（核心部というほど悪くはないが）。バンドは2m降りればさらに5mは続いているが、それを行ってもブッシュに入らなければならず、それならここからブッシュに入っても大差はないので、3P目はブッシュ付きリッジを直上する。4P目、ブッシュ帯を左トラバースするとF滝の上に出た。E滝は幅70mに圧縮され奔流となって躍っている。しかし、ブッシュが下まで降りてきており、私には迫力というものは感じられなかった。上部を偵察するため左岸を1ピッチ登る。ドウドウセン通常ルートの巻降りた所がすぐそこに見える。今日中にいくらでも抜けられるだろうが、暗くなってしまうと家に帰れなくなってしまうので、仕事に穴を空けてしまうことになる。それは絶対に避けたい。仕事しなければ生活が成り立たず山も行けなくなるので、私は仕事第一という考えは昔から今まで変わっていない。高橋さんには申し訳ないが今日はここまでとする。F滝上に戻ると時間はまだ12時であった。昼食をしていると、右岸上部を今朝ビバークしていたパーティらしき人がトラバースしているのが見えた。それを見て、右岸に渡ればここで悪天に遇ってもブッシュに逃げられることが分かった。F滝落口を右岸に

行けるが、ここは少しの増水でも渡ることは不可能になってしまう。このところ天気にはついていないし、次回もあぶないものである。私の頭の中に遊び心が浮かんだ。ここにチロリアンを張っちまえ。5P目になるが、東大スキー山岳部が下降したルートを上る形になる。高橋さんがF滝落口右岸のクラックにハーケンとフレンズをぶち込み乗越す。こちら側はコシアブラの木をチロリアンの支点にしたが、右岸には支点となるものがなくボルトを3本使用する。チロリアンロープ設置後、高橋さんは

登攀ルートを下降し先程打った残置ハーケンを回収する。ここに金物をデボし下降した。

帰り道、タマゴタケがたくさん採れ、自宅へのお土産とする。このタマゴタケで来週また赤谷川に来られることを期待しよう。

川古温泉(3:29)ー徒渉点(4:44)ー日向窪出合(6:20~6:56)
ールート工作終了(13:30)ー川古温泉(不明)

(本図 記)

私の50名山

先日の山行の時の高木の話によると、高木のご母堂様は最近100名山登頂を達成したそうである。意欲的に山行を重ねているという事は聞いていたが、これで登山も一区切りと思いきや、今度はハイグレードハイキングを目指すとか。いやいや恐れ入る次第である。巷では相変わらずの中高年による登山ブームである。どこの山に行っても頂上は中高年ばかりだ。特に100名山になると中高年で溢れんばかりの盛況である。私もその中高年登山者の一人だが100名山ハンターではない(つもり)。

過日、自分は幾つの山に登っているのか(100名山の中で)数えてみた。57山あった。今まで頂上に登るのを目的とした山ばかりをやっていた訳ではないので、頂上直下から降りてしまった山がいくつもあり、もちろんそれは入っていない。その中でバリエーションルート登山(無雪期の一般ルートではないという意味で)と言えるものは50山であった。

晩秋から春にかけての岩壁登攀を含む雪山登山は(雪)、山スキーは(ス)、沢登りは(沢)、無雪期の岩登りは(岩)として分類してみた。

利尻岳(雪)、岩木山(ス)、八甲田山(ス)、八幡平(ス)、岩手山(雪)、早池峰山(ス)、鳥海山(ス)、月山(ス)、吾妻山(雪)、安達太良山(ス)、磐梯山(ス)、会津駒ヶ岳(雪)、越後駒ヶ岳(雪)、平ガ岳(沢)、巻機山(ス)、燃ヶ岳(ス)、谷川岳(雪)、雨飾山(ス)、苗場山(ス)、妙高山(ス)、武尊山(ス)、四阿山(ス)、浅間山(ス)、筑波山(岩)、白馬岳(雪)、五竜岳(雪)、鹿島槍ヶ岳(雪)、鋸岳(雪)、立山(ス)、槍ヶ岳(雪)、奥穂高岳(雪)、焼岳(雪)、乗鞍岳(ス)、御嶽山(ス)、蓼科山(雪)、赤岳(雪)、両神山(沢)、甲武信ヶ岳(雪)、金峰山(雪)、瑞牆山(岩)、大菩薩嶺(沢)、丹沢山(沢)、富士山(雪)、木曾駒ヶ岳(雪)、甲斐駒ヶ岳(雪)、鳳凰山(雪)、北岳(雪)、間ノ岳(雪)、白山(ス)、大山(雪)

複数回登頂しているものについては(雪)を優先したが、しかしどうだろう諸君、(岩)の時の登頂がいに少ないか一目瞭然だ。岩壁を攀じて山頂へ、なんて格好の良いことを並べ立てて登っていたが、実際には口だけだったのか? いやいや100名山には岩場が少ないことや、岩場があっても山頂から離れていることが多いのも一因であろう。岩登り中心の山行を続けてきた私には、山行回数が多いわりに登頂回数が少ないのが頷ける。今みたいに沢や山スキーに行き出したのは40歳前後からだろう。したがってここ10数年で登った山が多いのも事実なのだ。

50山登るのに35年という年月を費やしている。これから100名山ハンターになるつもりはないので、あと50山登るのにさらに35年かかる計算だ。すると俺って幾つになるのかな。100名山達成より、それまで生きられるかどうかが問題だわな。岩も登れなくなってきたし、そろそろ歳相応に100名山でもやるべきなのだろうか。万が一、やることになってバリエーションルート100名山しかないだろうな。しかし、美ヶ原や霧ヶ峰、開聞岳などはバリエーションルートなるものがあるだろうか。自宅の裏山である筑波山は、頂上直下の岩場が登攀可能の頃登ったので入れておいたのだが、今は登れない。まあ、そのときになったら考えればいいか。今は他に登りたい山、沢、岩がたくさんあるので、それをまず消化するでしょう。

このところ、左踵骨折の後遺症、右膝前十字靭帯断裂の後遺症が出てきて調子があまり良くないせいか、いろいろなことを考えるようになってきた。100名山やることになったら若い会員諸君よ、そのときは俺に付き合ってくれよな。

(M)

南沢右俣

1999. 9. 5

パーティ L 古山正文、渡辺聡子、吉田仁

クラブに入会して、早2カ月。あっちこっちの山に行ったけど、東北の山は、初めてである。俺は東北の山は何か好きなんだな〜。どうしてかって、ん〜、しいて例えるならば“本上まなみ”的な山だから!!。その訳は一見派手そうに見えるけど、実は古風で、気品があり、ちょっぴり恥ずかしがり屋さんでお茶目、そんな感じがあるからです（昔で言うなら、吉永小百合ってどこか）。ちなみに、丹沢や奥多摩の山はと言うとどこかあかぬけた感じがあって小綺麗、そんな印象を受ける。そう南沢右俣はそんな東北の香りがプンプンする。まさにそんな感じの沢だった。

0:00。甲子温泉到着。メンバーはProf 古山さん、渡辺嬢、そして俺の3人パーティ。2人は到着するなり草々に巣作り開始、そして就寝。かなりお疲れのようだ。一人残された俺は、クーラーボックスからキンキンに冷えたビールを取り出し一人寂しくお星様に乾杯。

翌朝、6:00起床、快晴。でもこの時期になると結構寒くてなかなかシュラフから出れないッス。そして7:00出発、眠いけど天気がよけりゃ気分もいい。30分ほど歩いてちょうど体も暖まってきた頃に出合に到着。滝登りと言う点では、阿武隈流域の中では最も楽しい沢で10m前後の滝が10本近くあっていずれも直登出来るらしい。この猛暑続きの俗世間から逃避して腐りかけた心と体を洗うには、持って請いの場所って訳だな。そんじゃあー、洗い流しに行きますか。

出合から5分と経たずにF1-10mにぶつかった。早速、ザックからロープを引き出す。ここをフリクションを利かせながら、右から軽快に登る。ロープを仕舞いトコトコと沢を詰めて行くと直ぐにF2-10m、これも右から登る。ガバホールドだ!!。そして又ロープを仕舞って、ちょこっと行くとF3-15m、又ザックを下ろしロープを引き出す。とても忙しいです。この滝を登っている時に単独行の釣り師が追いついてきたが、滝壺の中でバチャバチャやっている我々を見て、肩を落として帰っていった。残念だったネ。そんなこともありながら順調に進行は続く。この後も、幾つかの滝を越えて、左俣を遡横目に先に進むと30



南沢・30m大滝下にて、渡辺&吉田

m奥の大滝に到着。ここは左から登る。決して難しい所じゃないけど念の為ロープを出した。何と言っても、まだ俺と渡辺嬢はビキナー、古山さんには世話を掛けっぱなし、御手数をお掛けします。そしてトイ状のナメを越えると次第に水が消えてきた。後は甲子岳を目指して登るだけ楽勝と思いきや、最後にやられました。滑り台状のスラブを暫く登って、視界が広がったと思うとそこは頂上に向けて、ピッシリと小砂利の乗ったスラブが広がっているではないか!。コンビニの前でたむろしているコギャル（死語）も怖いけどこっちはもっと怖い。滑ったら止まらなそう。這う這うの体で、ブッシュ帯に逃げ込んだ。ヤブに入りゃあ、こっちのもの。ガシガシと前進していると、ひょっこりと登山道に飛び出した。

温泉にて……

甲子温泉で汗を流していく事にした。パンフを見ると、混浴♡って書いてある。淡い期待をしつつ大浴場に入っていくと、ミシュランのマスコットの様な叔母ちゃんが2人、フロの縁に、トドの様に横たわり、入っている男どもを、品定めしている最中であつた。御多分に漏れず、

俺達も餌食に!!。ん〜、目でレイプされているようだ。負けじと見返してやるが目が潰れそうなのでやめた。混浴ってこんなもののネ。

(吉田 記)

ドウドウセン&裏越ノセン (その3)

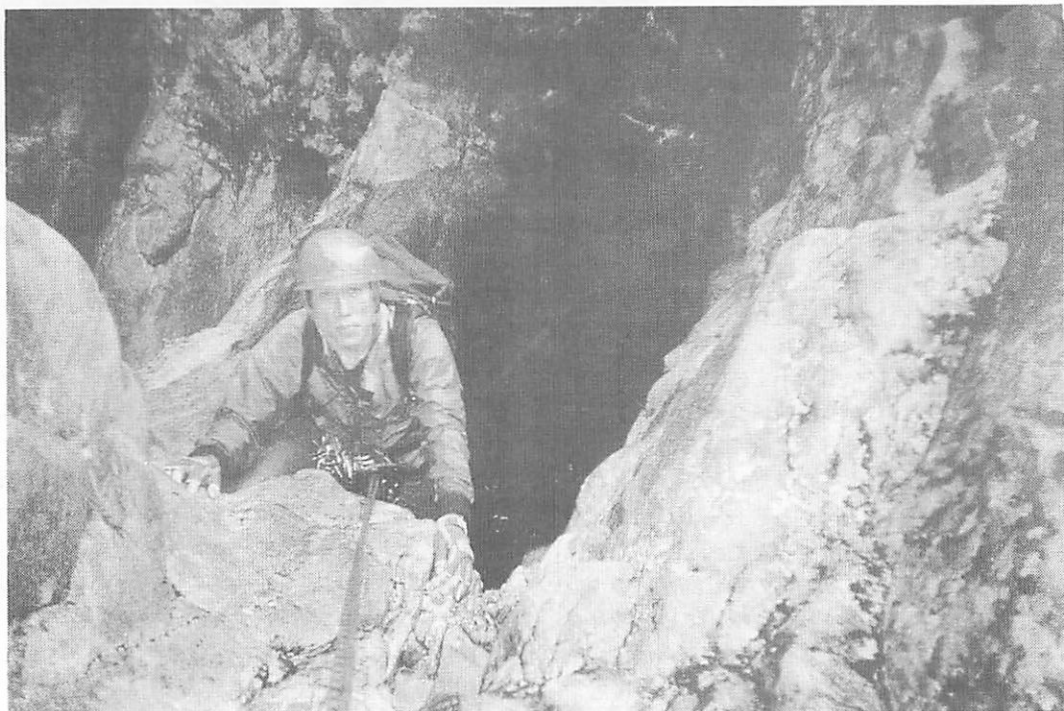
1999. 9. 11

パーティ L本図一統、高橋弘(無所属)

10日夜。仕事を早く切り上げ川古温泉に向かう。月夜野インターを出るとまたもや雨だ。いいかげんイヤになってきた。空に向かって「俺をバカにするのもいいかげんにしろ」と怒鳴ってしまった。だって今年になって赤谷川に来るのは6回目なのだが、雨か雪に降られない事が一度足りともないんだもの。仕事だって、この2週続けて2連休してしまった。仕事第一の私には大きな犠牲を払っているのだ。チロリアンは張ってあるし、もうこうなったら少しの悪天では突っ込むぞ、と意気込んで眠りについた。高橋さんは既に到着しており寝ていた。

11日。4時起床。高橋さんは「本図さんのことだから、今回は雨でも突っ込むだろうと既に準備は終しておいた」と言っておられた。通い慣れたこのアプローチも今回は最後にしたい。巨岩地帯の岩達も顔なじみになってしまい、岩を見ると何処に登れば良いか覚えてしまった。今日は扇沢(日向窪)まで2時間40分で着いた。

8時に登攀開始するが、扇沢(日向窪)でデボを背負い、自分達の打ったハーケンはすべて回収していくので、登るにしたがって荷物は重くなる。お互い、前回フォローした所を今回はリードするという形でチロリアンに着いた。右岸に移る方法としては、F滝落口を渡る以外にE滝左岸のバンドをトラバースしてD滝落口を渡るルートも考えられたが、後者の方が多少岩を進めるというだけで、どちらを取っても大差ないので前者に行くことにした。高橋さんがチロリアンブリッジで渡りチロリアンロープを回収し、私はF滝落口に行く。その前にF滝左岸にバンドがあったので、これを降りて調べてみるとG滝左岸のバンドといくらか離れておらず、G滝左岸のバンドをそのまま最後まで登ってくれば、無理なくF滝落口に出られることがわかった。このルートを採ればよりスッパリしたルートになるであろう。6P目、ブッシュ帯と岩のコンタクトラインをトラバースしてD滝落口に



B滝を登る本図

でる。高橋さんが登って来てD滝落口を左岸に渡りC滝を偵察するが、泳いで取り付いてもボルトを多用しそうなのでこのまま右岸に行くことに決定。7P目、高橋さんがブッシュ混じりの壁を攀じて行く。まもなくコールがかかり登ってみると、ここが岬（東大パーティの命名）であった。下には彼らの残したハーケンが見える。懸垂しなければならないが、ここからではC滝のど真ん中に降りてしまう。8P目、5m登り垂直ブッシュ帯をトラバースする。9P目、ブッシュを支点に15mの懸垂でC滝落口に降り立った。10P目、右岸をへつり小滝を2つ越す。11P目、B滝右壁を高橋さんが登るが、水流に押され滑落、私の足元まで落ちてきた。ここにボルトを一本打つが、裏越ノセン、ドウドウセン通して初めての前進用ボルトだったので、ちょっと残念だったがこれも仕方あるまい。このボルトは水流際なので1~2回の増水で無くなってしまふであろう。B滝落口の釜は昨年来た時、A滝釜の水が煮えたぎる様に吹き出していたが、今は底からコンコンと静かに湧き出していた。去年、こんな所どんなふうに登れば良いのかと考えてしまったが、所詮去年みたいに水量が多いときは登れないのだ。12P目、A滝左壁の易しいフェースを登り登攀終了とする。固い握手、この時のために行動を共にしてきた高橋さんに「ありがとう」とお礼を述べる。高橋さんは、なんとザックに缶ビールを3本も持ってきていたのだ。乾杯をして完登の喜びに浸った。

扇沢（日向窪）まで降りて行くとルートが分からなくて迷っている3人パーティに出会った。今降りてきたルートを教えてあげると「助かりました」とたいへん喜んでおられた。このパーティは、ACMLに記録を出していたので後で分かったことだが、アルペンクラブ・アルファの方々らしい。さらに少し下ると、今度はヤブの中でモゾモゾやっている2人パーティに会う。やはりルートに迷っていたようで「おーい、そっちじゃないよ、こっちだぞ」と高橋さんが声をかけてやった。完全に覚えてしまった巨岩地帯をガンガン飛ばしてと言いたいが、実際は喜びを噛み締めながらゆっくりと下って行く。マワットノセンとマワット下ノセンは来年登ろうと心に誓う。徒渉点に着くころ大粒の雨が降ってくる。あのパーティは時間から言ってドウドウセン上の河原でビバークだろうから、この雨の中では不安だろうなあ、と高橋さんと話し合っていた。

帰り道、林道工事中の所は大きくえぐられていたが、そこはそれモンキーちゃんとゴリラちゃんだから何とか通過できた。普通のバイクだったらお手上げだろう。

月夜野のいつもの中華料理店“タムラ”で打ち上げをする。そうか今日はまだ土曜日だっけ。明日誰かが谷川に来ると言っていたな。サトちゃんの所に電話を入れると『行くことは行くのですが、何処に行くのか分かりません』とのこと。???行き先分かんねえで、どうやっ

て準備すんだべ???。古山に連絡しても不在。しかたなく合流は諦めて帰路についた。

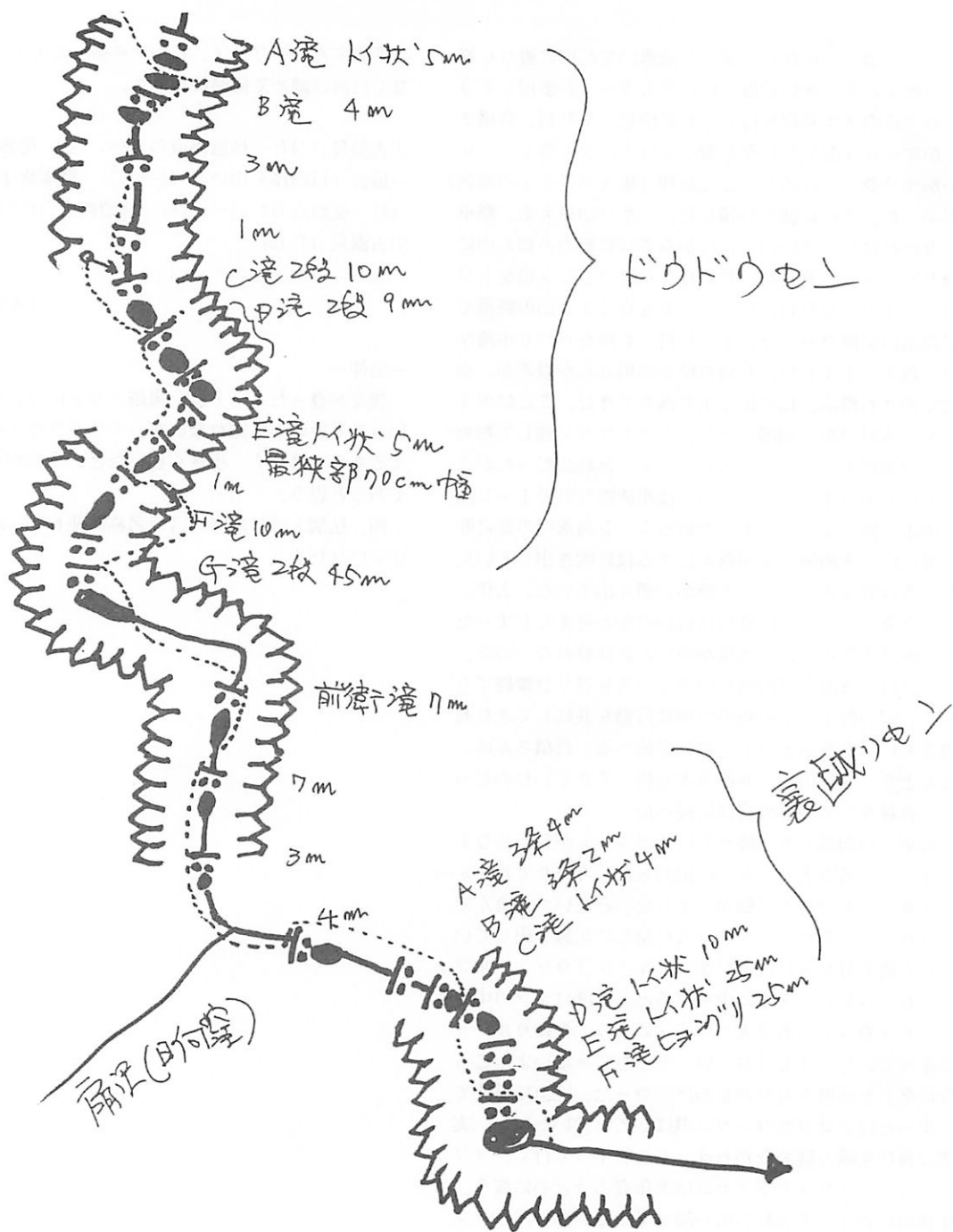
川古温泉(4:47)ー林道終点(5:14~5:24)ー徒渉点(5:56)ー扇沢(日向窪)出合(7:27~7:55)ー登攀終了(13:02~13:48)ー徒渉点(16:05~16:20)ー林道終点(16:51~16:57)ー川古温泉(17:36)

(本図 記)

ー追伸ー

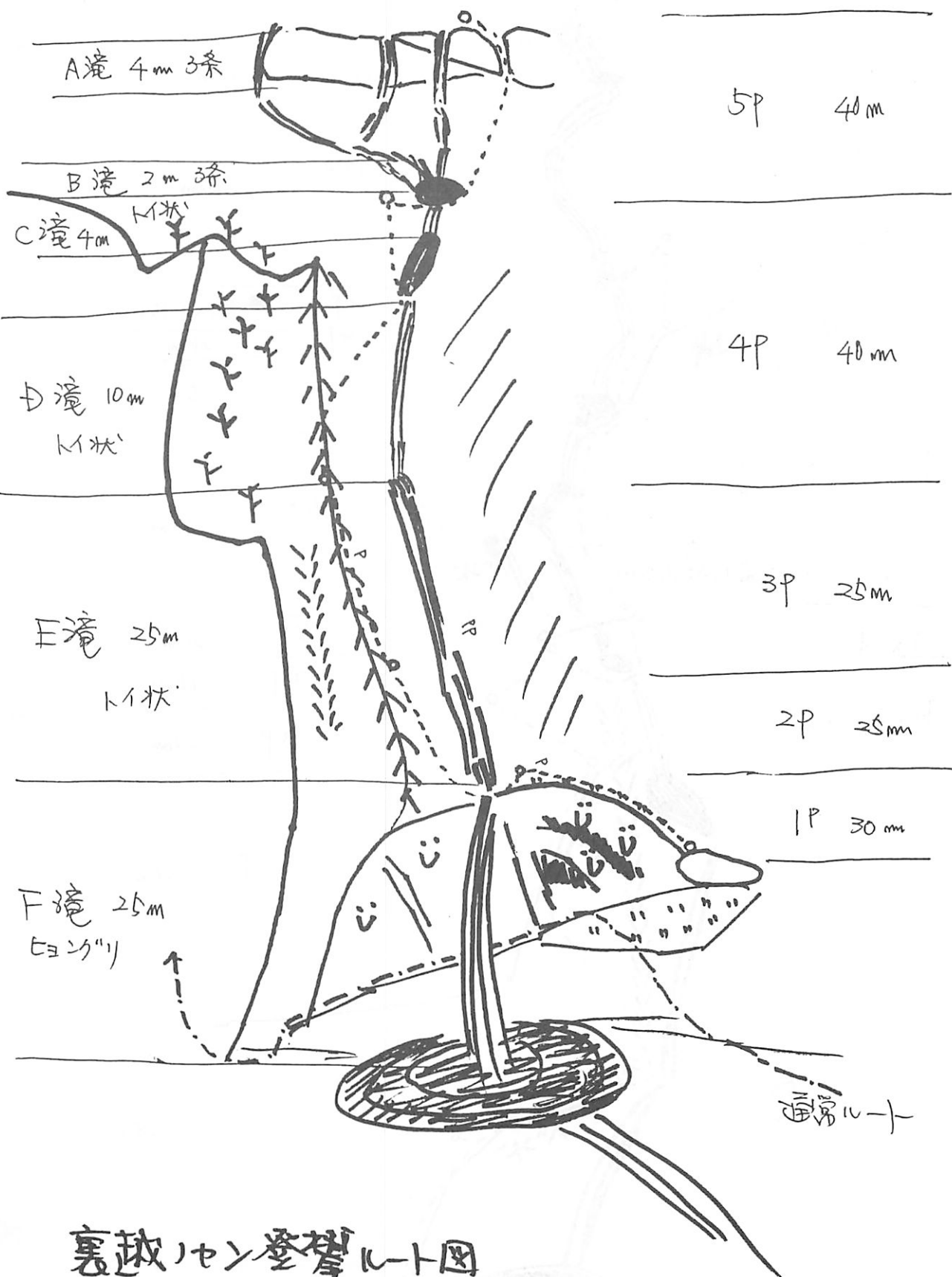
我々が登ったルートは、裏越ノセンについては直登といってもいいかも知れないが、ドウドウセンは直登といえるものではなく、小さく巻いたというのが正しい表現であると思う。

尚、私個人は日向窪と言う名称は使わず、扇沢と言わせていただく



ドリウドゥン. 裏越の山 逆行程図

作図 本図



裏越ヤン登攀ルート図

残置ハッケン

A滝 トイ状 5m

B滝 4m

3m滝

1m滝

C滝 2段
上 3m
下 5m

D滝 2段 上 8m
下 1m

E滝 5m トイ状(最狭部幅 70cm)

1m滝

F滝 10m

G滝 2段

上 25m
下 20m

12P. 15m

11P. 10m

10P. 40m

9P. テンズイ 15m

8P. 20m

7P. 25m

6P. 40m

5P. 30m

4P. 40m

3P. 20m

2P. 40m

1P. 20m

ドリドリセニ登攀ルート図(滝名は東大パーティによるもの)

作図 本

笛吹川 鶏冠谷・左俣

1999. 9. 13

パーティ L 古山正文、吉田仁、渡辺聡子

12時前に西沢渓谷入り口の駐車場に到着してみると何台か車が止まっており、かなり盛り上がっているパーティもあった。ふと空を見上げると満天の星の中に流れ星を発見。わーいラッキーと気をよくしてテントのファスナーを締め、と同時に眠りの淵へ・・・。

朝食の準備をしているらしい声で目が覚めた。まだ5時30分だ。私達の出発予定時間は7時だったので再び横になるが、外からは相変わらず大声が聞こえてくる。声からすると昨日の夜盛り上がりだ。ほとんど寝てないだろうに元気だわと感心するも、朝は静かにさっさと出発して欲しいなと思う。すっかり目が覚めてしまったので散歩に出かけると青空が広がり太陽が顔を出し始めていた。ブラブラしているとさっきの人達がやってきたのですれ違う時に訪ねてみると鶏冠谷とのことだった。

駐車場に戻り準備をして私達も出発。帰り道になるであろう鶏冠尾根が見える。舗装道路をしばらく歩くと廃墟と化した村営西沢山荘が現れた。ここから気持ちのいい山道を進む。釣り橋を渡り西沢と東沢の分岐を過ぎて鶏冠谷の出合に到着。何に使うのか太い電線がはってあった。ちょっと興ざめだなと思いつつ遡行開始。1.2m魚止めの滝にきた時

『直登は流れの右って書いてあります。』
と言ってみるが却下され右から巻く。しばらく歩くと先ほどのパーティに追いついた。私達より1時間以上早く出発したはずなのによもやこんなに早く追いつくとは思わなかった・・・。ナメ滝が続く、ウォーターライダー

をやりたい衝動にかられる。2.0m逆「く」の字滝は右側を越え、続いて出てきた2条1.0mのナメ滝では苔に足を滑らせてはでに転んでしまった。アイタタタ・・・。

二俣を左に入り幾つかの滝を登り、1.5mボコボコ岩の滝は右から巻いてさらに滝を右から左から登っていった。二の沢出合を過ぎた頃から太陽が滝を照らしはじめ、2.0m4段の滝は落ち口に虹がかかっている所に入っていったシャワークライム。ああ楽しい。三の沢出合の所で小休止して再び歩き出す。足を滑らさないように慎重に慎重にとばかり考えながら歩いていたら、ふと気付くといつの間にか水が濡れかけていてちょっと損したような気になる。この後は踏み跡をたどって鶏冠尾根へ。ガイドブックには藪こぎ40分と書いてあるが、その必要は全くなかった。

靴をはきかえて、古山さん曰く『本日の核心』鶏冠尾根を下る。鶏冠山のほうへ向かい頂上（多分あれがそうだったと思うのだが・・・）を過ぎ、第三岩峰は右を第二岩峰は左にある巻き道を越える。第一岩峰は懸垂で降りた。第一岩峰を越えるとあとは樹林帯のなかを沢沿い、尾根沿いにどんどん下る。道々にテープがまいてあったがそれでも何度か道はずしそうになった。テープがあってもさえ道はずしそうになるのだから無いと絶対迷うだろうな～と思う。沢の音が聞こえてくるとやがて東沢にでて、あとは朝来た道を通って駐車場に戻った。

(渡辺 記)

幽ノ沢・V字状岩壁右ルート

1999. 9. 26

パーティ L 古山正文、渡辺聡子、吉田仁

土曜の夜、日曜日と天気予報では晴れ、降水確率10%にもかかわらず一の倉沢に着くと雨がバラバラ。朝方にはザーザー降りの大雨になった。谷川特有の天気らしいけど、俺は遭難者の涙雨何かじゃないかと思う。そんな天気とは裏腹に、9/25のSaturday night、一の倉の駐車場にはほぼ満車状態。ビール1本をかつくって早々にテントに潜り込んだ。しかし、後から後から車は、一の倉沢に御到着。その度にヘッドライトでテントを照らされるし、あっちこっちから宴会の声は聞こえてくるし、ヒタヒタと便所へ向かう足音も引切りなしで朝までよく眠れなかった（歌舞伎町でキャン

プしているみたいだゾ）。

そんなこんなで翌朝は、雨は上がっているものの谷川岳には厚い雲がかかっていた。晴れてくれるのを願いながら定刻通り、6:00出発。天気もカールボーデンを登り出した頃には青空が広がってきた。この日の幽ノ沢はV字の右には俺達を含めて4パーティ。中央壁には2パーティで大賑わい。途中、アプローチに先行パーティを追い抜き、取り付け一番乗りかと思いきや、後から来た3パーティにいつの間にか追い抜かれてしまった。そのパーティは通常トラバースするたいぶ手前からトラバって120Ⅲフェースに入っていた。渋滞と落石を避

ける為なのか？、唯、単に分からなかったただけなのか？、その真意の程は分からなかったけど『何だよ～、スリィー』って感じ！（ガイド登山という感じだったので前者が正解）。という事で俺達がトラバっているパーティを横目で見ながら、カールボーデンで、2ピッチロープを出し、40mⅢ級のトラバースへ。簡単だけど、スリッしたら振り子で向こう側の壁に叩き付けられるだろう。本チャンデビューの俺はそんな極めてマイナーな事を感じながら慎重にここを通過して行った。そしてついにやってきました。右ルートの取り付け！。気温14°。風が強いので体感温度はもっと低いだろうに背中汗でグッショリ、何故かしら？。

120フェースは傾斜も緩く、スタンス、ホールドともに豊富。何より岩が乾いているのが有り難い。しかし、何せこの日は右ルートには4パーティもいて上から下から、野郎どもの図太い声で『ロープ、いっぱい！』『ビレー、解除！』の声が響き、誰の声だかよく分からない。そんな時に『ビレー、解除！』の声が・・・・・・。

渡辺『今の・・・、古山さんの声かな？～』

俺『ウン、そうじゃない』

渡辺『ビレー、解除しま～す！』

すると明らかに古山さんの声で『あー！。何～！（怒）』登っている最中に、いきなりビレー解除。何て言われて「何、血迷った事いってんだ」っと思ったでしょう。ゴメンナサイ。あとこんな事もあったゾ。俺がビレーをしている時なんだけど、セオリー通りに残りのロープの伝達をしていったのだが、prof古山さんには何故か『ロープいっぱい！』の声だけが聞こえたらしく、『残り〇〇m』の声は届いていなかったようだった。その時、古山さんは壁のド真中、上にも下にもいけないう状態。『ちゃんと、残りのロープは教えてくれなきゃ駄目だよー』の叱咤の声。暫くすると、ハーケンを打つ音が聞こえてきた（こりゃあ～、まずい事になってるぜ）。上に行ったら怒られると思い、その辺にロープを縛って逃げちゃおうかと思ったけど、そんな事は出来る訳が無い。恐縮しながら登っていった。重ね重ねゴメンナサイ。

そして、25mⅢルンゼ。やっそこ120mフェースを登りきりテラスで次のピッチの準備をしていると、上から『ラ～ク！！』の声が。ラクって言われたって、ここは3人がやっと立っていられる程のスペースしか無い。逃げる場所なんてありゃしない。しかもここから真っ直ぐにルンゼが延びている。どう考えても直撃コースじゃん。3人で顔を引き付かせながら、とりあえずしゃがみこんだ（それしか出来ない）。後は神のみぞ知る状態。

“バッコ～ン”、あ～あたた！俺のヘルメットに当たりやがった。三和豆吉のトーフ（安くてうまい！）程の大きさの岩だ。幸い浅い角度で当たったので、ファールチップの様に俺のヘルメットでワンクッションして下へと消えていった。そして気を取り直してprof古山さ

んが登っていくと20～30mくらい行った時だろうか？、又『ら～く！！』の声が、今度は古山さんのザックにジャストミート（やってくれるじゃね～か）。アルマゲドンだって1つの隕石を落とすだけなのに、さっきの興奮も覚めやらぬうちの2発目をぶち込むなんてどういう訳ヨ！。上であつたら嫌みの1つも言ってやろうと思っていたんだけど“ビュ～”って風が吹いているだけで風も形も無し。何て逃げ足の早いパーティでしょう（詫の1つぐらい入れなさい）。

そして話しは30mフェース、ルンゼ。ここは先行パーティが落石を起こした場所。ガレっているのかと思いきや、そんな様子は無し。草と岩のミックス帯だ。しかし登って行くとその理由がわかった。長く伸びる草の中に浮き石がメチャクチャあるのだ。気を抜くと今度は俺達が落石をを起こしそうである。でもそれはかなりヤバイ事になりそう。どうしてって、後続パーティは大渋滞。もし落石を起こせば、下手な鉄砲も数打ちゃ当たるでおそらく誰かにぶち当たるだろう。神経を使いながら猫のように登る。落石を起こす事なく、このルンゼを登りきりやっ草付きでルンゼの上に出た。『やったよー。母さん。おれやったよ！』てな感じ。後はバケツと化した路跡をたどり登山道に出た。沢登りの時とは又一味違う達成感でいっぱいだ。さ～て、次はどんなルートを登ろうか！！（晴れた日にネ）。

（吉田 記）

後日……………。

ブルルル～、ブルルル～、ガチャ（電話の音）

『もし、もし、今晚は。古山です。週末ネ、黒伏山の中央ルンゼに行くから、よろしく』『エッ！、南稜じゃ無いんですか？』

『ウン、変更。もうちょっと難しい所にしたからサー』

『チョッ、ちょっと待ってください』

バラ、バラ、バラ（日本の岩場をめくる音）

『あの～？、人工A2、Ⅳ級って書いてあるんですけど（汗）』

《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

月報

◎Rohman NO. 171, 1999, 7, B5 42P 浦和浪漫山岳会

会越・赤崩山菜山行、海谷・取入口高地、南会津・毛猛沢・稜線・前毛猛山・毛猛沢、奥秩父・鶏冠谷、谷川・足拍子前衛スラブ、白毛門山、徒渉訓練、湯松曾川、春の集中・釜川サゴイ沢、清津峡棒沢、釜川右俣・小松原湿原、栃川曲り沢・天狗の庭、昌次新道・苗場山ほか

◎Rohman NO. 172, 1999, 8, B5 58P 浦和浪漫山岳会

会越・赤崩、夏合宿白戸川・三羽折沢右俣・滝ノクサ沢左俣、クラ前沢右俣・三羽折沢左俣、崩沢左俣・熊次湯沢、下ノ沢・こんにゃく沢、滝ノクサ沢、芦安沢・メルガ俣沢、メルガ俣三角沢・大曾根山・小沢、洗戸沢前沢左俣・崩沢右俣、洗戸沢ワセ白ハゲ沢・芦安沢左俣、滝ノクサ沢右俣・村杉岳・宿沢ほか

◎Rohman NO. 173, 1999, 9 B5 52P 浦和浪漫山岳会

虎毛・皆瀬川虎毛沢、奥利根・樽俣川・南田代・文神沢、利根川本谷、南会津・安越又川・坪入山・窓明山・小豆温泉、川内・小六山、赤花沢スバブ状ルンゼ、第二ルンゼ右俣、毛猛・こったが沢中俣・内松沢左の枝沢・内松沢左俣・足沢山ほか

◎わらじ NO. 520 1999, 7 B5 22P わらじの仲間

春の集中・御神楽岳御神楽沢Bルンゼ、戸沢川右俣右沢、広谷川内湯沢ダイレクトスラブ、戸沢川右俣左沢、大鍋又沢中俣左沢、霧来沢古滝沢・大鍋又沢左俣左沢・右沢・笠倉山、金城山・つばくろ岩ダイレクトスラブ右俣右稜、白山・大ノマ谷・三方崩山・間名古の頭・白山・別山・日照岳ほか

◎わらじ NO. 521 1999, 8 B5 24P わらじの仲間

奥利根・樽俣川沢種沢、川内・谷沢川毛無沢、下田・五十嵐川ヒグラ沢・大倉沢、谷川・ヒツゴ沢、越後・北ノ又川滝八十沢右岸中央スラブ左俣、大峰山脈・芦の瀬川本流、会越・蒲生川大白沢、奥利根・樽俣川本流・赤倉岳・オミキスズ沢、日高ビヤカール・トヨニ川左俣・トヨニ岳、比良・奥ノ深谷と口ノ深谷ほか

◎わらじ NO. 522 1999, 9 B5 20P わらじの仲間

夏合宿・飯豊実川裏川矢沢、北股川藤十郎沢・胎内川西俣沢・作四郎作二郎・二王子岳、前川ビンカガクチ沢、実川前川御鏡沢、大石鏡西俣川鉾立沢、大石川東俣川大沢、川内・早出川中杉川、北岳バットレス継続登攀ほか

◎逍遙 NO. 98 1999, 7 B5 20P 逍遙溪稜会

男鹿・大巻川左俣、奥秩父・本谷川金山沢本谷、奥武蔵・川浦谷本谷、奥多摩・日原川小川谷滝谷、割谷、水根沢谷、奥秩父・笛吹川東沢釜ノ沢東俣、虎毛・皆瀬川春川西ノ又沢・虎毛川左俣・赤湯又沢ほか

◎逍遙 NO. 99 1999, 8 B5 202P 逍遙溪稜会

安達太良・石筵川、奥多摩・丹波川徒渉訓練、谷川・湯松曾川東黒沢金山沢・宝川武能倉沢、神室・大横川左俣、二口・名取川二口沢禿沢、谷川・湯松曾川ケサ丸沢ほか

◎逍遙 NO. 100 1999, 9 B5 28P 逍遙溪稜会

飯豊・胎内川足の松沢、朝日・野川布谷沢、谷川・阿能川左俣、朝日・猿田川ジッパ沢、三面川化穴沢左俣・水上沢、樹形川フスベ沢・水上沢ほか

◎Next! No. 43 1999, 7 B5 18P 山岳渓流釣り集団むげん

仲間の近況報告、山菜の話[安野さん私(本図)にもその場所教えて]ほか

◎Next! No. 44 1999, 8 B5 18P 山岳渓流釣り集団むげん

和賀川、葛根田川中ノ又沢・滝ノ又沢、友好団体会報紹介ほか

◎Next! No. 45 1999, 9 B5 18P 山岳渓流釣り集団むげん

足尾・坪川三重泉沢・ニグラ尾根・坪川林道ほか

◎とまのかぜ No. 80 1999, 7 B5 31P 童人とまの風

会越・叶津川餅井戸沢、足尾・庚申川笹ミキ沢、仁田元沢、船形・大倉川矢尽沢、会津・滝の沢、曲沢、栗子・摺上川烏川滑谷沢、西上州・野栗沢赤岩沢悪谷、越後・鱒沢右俣・左俣、大蔵沢・新江沢、大沢・鳴沢峰・小山田沢・五葉尾根、道行沢・矢打沢黒谷沢右俣、黒谷川左俣・道行沢左俣ほか

◎とまのかぜ No. 81 1999, 8 B5 26P 童人とまの風

飯豊・長走川赤坂ゲ沢・杉ノ沢、虎毛・赤湯俣沢・虎毛沢、栗子・摺上川叶堂沢、奥秩父・滝川水晶谷、笛吹川鶏冠谷2の沢、南ア・野呂川扇沢、シレイ沢、加治川古岐沢ほか

◎とまのかぜ No. 82 1999, 9 B5 44P 童人とまの風

西上州・二子山中央稜、玉川・大深沢・滝ノ沢、北ア・針ノ木岳・蓮華岳、南ア・扇沢、北ア・白馬岳・樽海新道、奥秩父・小川山、飯豊・胎内川坂上沢右俣、北ア・金木戸川打込谷、槍ヶ岳、朝日・岩井又沢畑沢、南ア・信濃俣河内ほか

◎山紫水明 No. 1999, 7 B5 10P 山旅の会

奥多摩・鷹ノ巣谷集中水ノ木沢、金左小屋窪、峰谷川坊主谷ほか

◎山紫水明 No. 1999, 8 B5 10P 山旅の会

丹沢・早戸川原小屋沢、雲取山、二口・太行沢ほか

◎山紫水明 No. 1999, 9 B5 18P 山旅の会

武尊・川場谷、栗駒・成瀬川北の俣桑木沢・肝沢川大沢・桑原岳・唐松沢ほか

◎すずらん通信 NO. 220 1999, 7 B5 23P 鈴蘭山の会

北ア・針ノ木岳スキー、奥秩父・ヌク沢、古礼沢、奥多摩・唐松谷、谷川・一ノ倉沢南稜、烏帽子奥壁ほか

◎すずらん通信 NO. 221 1999, 8 B5 16P 鈴蘭山の会

奥秩父・東沢釜ノ沢西俣、蔵王・小屋の沢本流、谷川・四万川本谷、奥秩父・入川、中ア・太田切川本谷、清津川釜川左俣、右俣、ヤド沢ほか

◎すずらん通信 NO. 222 1999, 9 B5 28P 鈴蘭山の会

奥秩父・股の沢、真の沢、谷川・ナルミズ沢、南ア・赤石沢・大雪沢沢、飯豊・胎内川東俣川坂上沢左俣、北ア・北ノ俣川・赤木沢、谷川・万太郎谷、二口・二口沢本流小松原沢、和賀・生保内川ほか

◎溪遊 NO. 107 1999, 8 B5 10P 溪遊会

台高・蓮川野江股谷、大峰・川迫川モジキ谷、比良・蛭狩り、台高・櫛田川布引谷、只見・赤崩、大峰・上多古川伊坪谷、台高・東ノ川シオカラ谷ほか

会報

◎野良犬通信 NO. 6 1999, 9 A4 20P チーム野良犬

屋久島・鯛ノ川千尋滝右岸スラブ、南ア・荒沢出合アイスクライム、白山スキー3本、雨飾山スキー、鉾ヶ岳スキー、北ア・スキー3本、白山・蛇谷赤石谷ほか7本、越前・久沢川迫谷・平家岳・日ノ谷左俣、越中・小川打谷中谷・負釣山ほか3本、北ア・黒部森石谷・弥太蔵谷右俣ほか2本、越後・清津峡ほか1本、加越・大聖寺川千束川、頸城・田海川倉谷大ギラ、台湾・怡堪溪・安来溪・萬里橋溪支流・安東軍山ほか

◎会報 NO. 13 1988, 3 B5 195P 東北大学山岳部&東北大学山の会

84~87年の記録、プータントレッキング、0B山行2本、北海道・残雪期の利尻岳、知床、東北・残雪期5本、沢登り14本、無雪期8本、初冬8本、冬山4本、春山6本、関東周辺・残雪期1本、沢登り3本、無雪期1本、初冬1本、冬山1本、春山1本、北ア・合宿4本、沢登り1本、無雪期8本、岩登り3本、春山3本、南ア・無雪期2本、冬山1本ほか

◎会報 NO. 14 1998, 5 A3 256P 東北大学山岳部&東北大学山の会

89~96年の記録、ロブジェ東峰、キリマンジャロ、北海道・残雪期2本、夏2本、冬山1本、東北蔵王・新嶺2本、沢登り9本、秋1本、初冬1本、冬山1本、氷3本、春山2本、スキー7本、東北飯豊・新嶺5本、残雪期2本、沢登り1本、初冬2本、東北朝日・沢登り3本、秋1本、初冬4本、冬山1本、春山3本、東北船形黒伏・新嶺1本、沢登り5本、岩登り8本、初冬1本、スキー3本、東北その他・無雪期1本、沢登り6本、岩登り1本、秋2本、学祭1本、初冬3本、冬山1本、スキー8本、関東周辺・無雪期1本、沢登り2本、岩登り1本、秋1本、初冬1本、冬山4本、春山1本、スキー1本、北ア・残雪期1本、沢登り2本、真砂定着7本、岩登り5本、夏6本、冬山5本、春山3本、中南ア・岩登り3本、沢登り1本、夏3本、氷1本、春山4本、屋久島・夏2本ほか

以上閲覧したい方は本図まで

編集後記

編集長の怠慢で、編集がだいぶ遅れてしまった。なにぶん不況の煽りでコストの低減、人員削減でかなり編集業務に支障をきたしてきている感がある。(冗談である。ハヒフヘホ〜ホッホッホ?)

2000年には元の状態に戻しますので、読者及び会員の皆様にはもう少し辛抱のほどお願いいたします。

【緊急告知。R&V誌編集員募集!】

編集委員…若干名。年齢…昭和に生まれた人。性別…人類なら男女を問わず。*手当等は面接にて。ふるっての応募を期待しま〜す。



季報 [R&V] 第34号 発行1999年 夏

発行者: 本図一統

発行所: ACC-J 茨城 〒306-0501 茨城県猿島郡猿島町逆井318

生 井 一 男 方

編集者: 生井一男

印刷所: やさと 印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団